

エデン・クロニクル

機械人形アリス^{ぜろ}式^{しき}

秋月あきら

アリス観光ガイド

「本日、帝都の観光案内をさせていただくアリスと申します」

アリスの顔を見た観光客　草太そうたは驚きの表情を浮かべた。

「えっと、君が？」

「ええ、わたくしが案内役を勤めさせていただきます」

「マジで？」

「マジでございます」

陶器のように白い肌をした少女は無表情のままそう言った。

一見ドレスにも見える黒いメイド服を着た少女は、腰までた
らした金髪の髪を風になびかせ、魔力のこもった蒼く透き通る
瞳で直樹を見据えていた。そして、なぜか背中に自分よりも身
長のある箒を背負っていた。

「まさか、案内役が子供だとは思わなかった」

「帝都は初めてでございますか？」

「うん、まあ」

「わたくしは機械人形でございます」

この街では見た目で人を判断してはいけない。機械人形アリスは良い例だった。

「すげっ、生で機械人形見たっ！」

「普段わたくしは魔導師に仕えるメイドでございます」

「観光ガイドはバイトなわけ？」

3 機械人形アリス零式

「はい、主人が家マスクを空けておりますので、時間を持て余してしまっているのでございます」

「バーの開店は夜からだもんな」

「えっ？」

人形の顔に驚きの表情が浮かんだ。

「すげっ、機械人形って人間みたいに表情作れるんだ！」

「はい、わたくしを作った魔導師は、わたくしに表情を与えてくださいました」

「まるで人間だな」

そう思ったとたん、目の前の美少女を意識し始めたのが、草太の頬がほんのりと赤く染まり始めた。

人間離れた整った顔立ちは、さすがは作り物であると言える芸術作品だ。その中でもアリスは量産型ではないと共に、同じ美を再現するのは不可能だろう。それほどまでにアリスは完成させた存在だった。

自分から不自然に視線を逸らす草太にアリスが尋ねた。

「どうかなさいましたか？」

「こんな可愛い子と観光できるなんて、ラッキーだなあって思っただけさ」

「わたくしは人形です」

「……………」

きつぱりと言われ押し黙った草太に気を使うこともなく、アリスはさっさと仕事を始めた。

「どこか行きたい場所はございますか？」

「人がいっぱいいる繁華街がいいな」

「それですと、この辺りか、ミナト区あたりが安全面からも良いかと思えます」

「うんうん、ミナト区ってところがいい。あれでしょ、そこってさ、ツインタワービルとかあるところでしょ？」

「そうでございます。では、まずはツインタワーがある帝都公園に向かいますよ。ついて来てください」

歩き出すアリスの背中に慌てて草太が声を掛けた。

「車の移動じゃないの？」

「わたくし普通乗用車の免許は持っておりません」

「マジで？」

「マジでございます。草太様の料金プランから考え、移動は電車とバスになります」

「めんどくさいよ」

「でしたら、今から帝都ツーリストにプラン変更の連絡を行えば、一時間以内に別の担当者が車でお迎えにあがりますが？」

「その場合、君じゃなくて他の人が案内役？」

「案内人とドライバーを別に雇えば平気です。が、その場合は料金が割り増しになります」

「そんな金ないから今のままでいいや」

草太が旅行会社に申し込んだのは、一日観光の激安プランで、交通費や食事などは自腹ということになっている。案内役のアリスの仕事は単純な観光案内と観光者のボディガードだった。ちなみに草太は聞かされていないが、このプランの案内役は社

員ではなく日雇いのバイトなのだ。

アリスは背中に背負っていた箒を手にとって、胸の前で掲げた。

「交通手段は特別な物がご用意できますが、それになさいませるか？」

「それって別料金かかるの？」

「無料でございます」

「そんなじゃそれで」

「ただ、高所恐怖症の方や、ジェットコースターなどのアトラクションが苦手な方、心臓の弱い方にはお勧めできませんが？」

まさか、と草太は考えた。箒を不自然に自分の前に掲げるアリスを見れば、自然とそんな考えも浮かんでくる。そもそも、あんな古めかしい箒を持ち歩いているのが不自然だ。あれで空を飛ぶに違いない。

「その箒で空を飛ぶの？」

「そうでございます。安全性については保障できかねますが、電車やバスよりも高速で移動ができます」

外装もシートベルトもない棒に跨って空を飛ぶなど、安全性がどうかかこうとかという問題以前の問題である。そして、アリスは言わなかったが、帝都では公的な乗り物以外での地上から一〇メートル以上の無許可飛行行為は禁止されており罰せられる。箒での飛行行為は罰せられる対象だ。

帝都ではジェットブーツと呼ばれる商品が売られているが、

これは科学や魔導の力によって大ジャンプをする靴である。このジェットブーツは通常五メートルほどのジャンプ力しか発揮しないが、改造や違法品も多く出回っている。

さも当たり前用にアリスは箒に跨り、自分の後ろに手を差し向けた。

「本来一人用なので詰めてお乗りください」

「う、うん」

詰めてと言われたが、草太はアリスから身体を離して箒に跨った。

「もつと詰めてください。そして、わたくしの胸をしっかりと両腕で抱え込むようにしてお握まりください」

「う、うん」

「もつとしっかりと握まないと落ちます」

「わかってるって……」

アリスの胸にゆっくりと腕を回し、顔を少し紅くする草太だが、それに比べてアリスの表情は無表情そのものだ。機械人形と云えど、身体を密着させることに抵抗感を感じ、へっぴり腰になる草太に、アリスがなんの感情も抱いていないことがわかる。

「それでは浮上を開始いたします。これに伴う事故等に関しては、一切責任を負いません」

「マジで？」

「マジでございます」

箒が風を起こしながらアスファルトの地面から三〇センチほ

ど浮いた。ここまではゆっくりと浮上し、すぐに一気に天高く浮上する。

水に浮くような生易しい浮遊感ではなく、強烈な圧迫感が草太の身体を襲った。

「もつと優しく!」

「口をお閉じください。舌をかみます」

「ぐっ!」

案の定、草太は舌をかみ、アリスの指示通り口を閉じることになった。

浮上を続けた筈は地上から約一〇〇メートルまで達した。それでも辺りにはアリスたちよりも背の高いビルが天を衝く勢いで立ち並んでいる。

中でもひときわ目立つのは帝都タワーと呼ばれる二等辺三角形の電波塔だ。

地上八階の駅ビルなどは、ずいぶん下に見ることができ、車はまるでミニカーのようだ。

この辺りは帝都でも三本指に入るビル街で、都外からの足であるリニアモーターカーもギガステーションから運行されている。

都内でもリニアモーターカーが止まる駅は三箇所しかない。そのひとつがアリスたちの眼下にあるギガステーション・ホウジュだ。

ホウジュ駅は繁華街としても有名で、都外からの観光客も多いとともに、若者の街としても有名だ。特にホウジュセンター

「街は混沌とした活気に溢れており、危険を孕んだ帝都の闇が見え隠れしている。違法ドラッグはもちろん、武器や危険な魔導具も出回っている。それでもホウジュは大きな街であることから帝都警察の監視の目はきつく、出回っている違法品は帝都全体で考えれば軽い物ばかりだ。

「カモにされるのはなにも知らない観光客ばかりでございます」

とホウジュ上空で草太に説明をしたアリスは、篲を走らせて東の空に向かって飛んだ。

ミナト区はホウジュ区から南東に位置する港町だ。

港貿易による発展を遂げたホウジュは、観光にも力をいれて、今では帝都の誇る観光街となった。

ミナト区上空に着いたアリスは草太の要望に応じて、旋廻による空中観光を実行した。

「あちらに見えますのが、ミナト客船ターミナルでございます」

「その先にあるのがメイブリッジだよね？」

「おっしゃるとおりでございます。夜間照明に照らされるメイブリッジは、まるで天に掛かる天の川のようにだと言われております」

青く輝く海は透き通る透明度を誇るが、それも人目に付く場所だけである。浄化装置が海底に埋められているのは、誰もが知っていることだ。人目に届かない場所では海洋汚染が進み、

へド口の底から悪臭を放つ泡が沸き立っている。

観光にマイナスとなる場所を除き、アリスは草太を箒に乗せてぐるりとミナト区を一周した後、帝都公園に隣接するツインタワービルのすぐ側に降り立った。

眼前に聳え立つ二対のビルは共に一〇〇階建てであり、一〇〇階と五〇階にある通路によって互いを行き来できる。

舗道は二手に分かれ、右の道はイーストビル、左の道はウエストビルに続いていた。

「どちらのビルに参りましょうか？」

アリスが尋ねると草太はうくと唸った。

「う〜ん、どっちがどっちだっけ？」

「左手に見えるウエストビルがシヨッピングビルになっており、イーストビルが主に企業向けになっております」

「腹へったしウエストでなんか食おうぜ」

「それでしたら、ご要望を申しただけければ、古今東西のありとあらゆる料理店をご案内いたします」

「金ないし、ファーストフードでいいんだけど。デスバーガーとかないの？」

「デスバーガーより、ワルドナルドの方がリーズナブルですけれど？」

「バカにすんなよ！」

「そういうわけではございません。わたくしは情報の提供をしますまでです」

この話はいままでというように、アリスは無表情のままウエ

ストビルへ足を運ばせた。すぐ後ろから草太が追いかける。

「おい待てよ、おいつてば」

「声を張り上げるとカロリーを消費し、余計にお腹を減らすことになしますよ」

アリスを追うようにウエストビルに入った草他は、すぐに天井を見上げた。

大ホールは一階と二階が吹き抜けになっており、二階の中央エレベータからは通路が蜘蛛の巣のように八方に伸びている。デザイン重視で使い勝手が悪いと利用者には不評だ。

アリスは草太の要望どおりにデスバーガーに案内した。

ホール中央の円形エレベーターに乗り、八方に伸びるガラス張りのトンネル上の通路を進み、眼に映るデスバーガーの看板。店内に草太が飛び込もうとしたのをアリスが無理やり押し倒して防いだ。

「なにすんだよ!？」

それは草太が怒鳴ったのと同時だった。

鼓膜を突く轟音と、爆発によって硝子の壁が砕け飛び散った。

なにが起こったの状況を把握する前に、草太の身体は小柄なアリスに抱きかかえられた。

「この場は危険と判断いたしました。退避いたします」

自分よりも身長の高い草太を抱きかかえながらアリスが走る。その行く手を妨害するように、再び店舗で爆発が起きた。それもひとつじゃない、次々と店舗が爆破されていく。

この異常事態に人々は叫び逃げ惑った。

ビルの出入り口には人が殺到し、将棋倒しのように人が倒れる。その光景を見た草他の顔は蒼ざめた。

「なんだよいったい!？」

「事態を把握するためには情報が少なすぎます。第一優先事項は草太様の安全確保でございます」

「帝都は危ないって聞いてたけど、まさかこんなに……」

「観光街での大規模な事件は稀でございます」

ビルからの脱出を計ろうと機械人形アリスが早口でコードを発動させた。

「コード000アクセス 五〇パーセント限定解除。コード005アクセス ウィング 起動」

アリスの背中から骨組みだけの羽のような物体が出現した。それは金色に輝き、小さなフレアを放出していた。

二階から飛び降り、吹き抜けのフロアを通過して一階に飛翔する。が、空中でアリスは制止した。出入り口に群がる人々の前で超合金のシャッターが下り、出入り口を塞いでしまった。

すぐにアリスは方向転換して、ガラス窓に向かった。

「本意ではございませんが、窓を破壊して脱出いたします」

「そんなことしていいのかわよ」

「緊急事態でございます。コード003アクセス コメット 召喚」

異空間からロケットランチャーを召喚したアリスは、片腕で草太を抱きかかえ、片手でロケットランチャーを持ち上げて肩に担いだ。

アリスが衝撃に備えるように草太に忠告を促そうとしたときだった。

防御システムが作動し、窓ガラスの外側が瞬時のうちにシャッターで覆われたのだ。

すぐさまアリスは口ケットランチャーをしまい、草太に説明せずに階段方向へ飛翔した。

階段へ飛び込んだ瞬間、階段とフロアをつなぐ出入口のシヤッターを降りてしまい、アリスは飛翔をやめて草太を床に下ろした。

「閉じ込められてしまいました」

「おいおいおい、階段に閉じ込められたのかよ？」

「そうでございます」

「あつちにはいた方がマシだったんじゃないのか？」

「この状況では、どちらとも判断いたしかねます」

階段には何人もの人々がアリスたち同様に閉じ込められていた。普段はエレベーターやエスカレーターを使用する人々が多いが、爆発事故のためだろう、階段に逃げてきた人々が数多くいた。

階段内に閉じ込められてもいつても、階段内であれば別の階への移動も可能だった。

「この場においても仕方ありません。上と下とどちらに参りましょうか？」

アリスが尋ねると草太は上を見上げた。

「そんじゃ上。つーか、上に行こうが下に行こうが変わらない

「じゃないの？」

「いいえ、この階段は五〇階と一〇〇階でイーストビルに繋がる連絡口と直結しておりませう」

「なんだよ、だったら早く行こうぜ」

「ただ、連絡口には出られませんが、イーストビルがことと同じような状況であった場合は、イーストビルの階段には入ることができませんが、フロアには当然ながら入ることができません」

「可能性に賭けようぜ」

「承知いたしました」

二人は可能性に賭けて上の階へと向かった。

仕事の休憩時間になった夏凜はさっさと事務所を出た。理由は同僚のおばちゃんたちに食事に誘われるのを防ぐためだ。

昼休みは手短に隣のウエストビルの飲食街へ赴く。イーストビルにも料理店があるが、ウエストビルには遠く及ばない店舗数だ。

清掃会社の制服から、いつものゴスロリに着替えた夏凜は。五〇階の連絡通を歩きながら、今日はなにを食べようと考えていた。

しかし、事件は突然起きた。

警報アラームが鳴ってもいないのに、連絡口とビルとの出入り口のシャッターが下りたのだ。

「なんなの、故障？」

夏凜は露骨に嫌な顔をして元来たイーストビルへと足を運んだ。しかし、イーストビルへの出入り口もシャッターが下ろされ、出入り不可能になっていた。

それだけではなかった。連絡通路に設置された緊急用のエレベーターも稼動していない。

閉じ込められたことを悟った夏凜は、慌てず騒がずその場で待機することに決めた。なんてことはなく。こんな事態にその場で待機しているような玉ではなかった。

夏凜はすぐさま腕時計型ケータイの短縮ダイヤルを押し、周りの人々がケータイが繋がらないといっている中、夏凜のケータイはすぐに繋がった。職業上、電話会社との契約内容が一般人とは違うのだ。

「もしもし真クン？」

《緊急事態で忙しい。要件は手短にな》

夏凜が電話をかけた相手は、ウエストビルに事務所を構える情報屋 真だった。

「ツインタワーの五〇階の連絡通路に閉じ込められちゃった」

《ツインタワービル全ての防御機構が作動したようだ》

「真くんなら解除できるんじゃないの？」

《結論から言うと、大変難しい状況と言えるな》

「このビルの制御を乗っ取るくらい簡単じゃないの？ この世の全てのコンピューター情報を操作できるって自負してるんからさあ」

真は元サイバーテロリストであり、闇の世界ではトップクラ

スの実力を持つていた。そんな真だが、一〇年ほど前から情報屋に転進し、今では帝都一の情報屋として名が知られている。

《こちら側で停電が起きた。そのためイーストの制御システムへアクセスが不可能になった》

「うんうん」

《ウエストは外部からのアクセスを完全にシャットアウトしたらしい。向こうも停電なのかもしれん》

「でもさあ、ここ電気ついてるよ」

連絡通路の電気はついていた。しかし、緊急用エレベーターは作動していない。

《その場所の制御はビルの外にあるコンピューターで行われている。ツインタワーはメインからの制御と、各ビルでの制御ができるシステムになっている》

「うんうん」

《その場所に緊急用エレベーターがあるだろう。それでさっさと脱出しろ》

「エレベーターが騒動しないんだよね」

《なに？ 電気がついていないのにエレベーターが動かないということは、メインコンピューターも何者かによって制御を奪われたらしいな》

「もしかして、ずっとここに閉じ込められたまま？」

《少し待っている。今メインにアクセスして メインがネットワークから遮断されている》

真は夏凜と話しながらメインコンピューターにアクセスをし

だが、メインコンピュータに外部からアクセスできない。外部とのネットワークを自主的に切断したか、あるいはコンピュータの故障だろう。

「うっそ〜ん、やっぱり閉じ込められたままなのお？」

《救出部隊が来るのを待つんだな。それでも外壁を壊すのにだいぶ時間を要するだろう。防御システムの稼動したツインタワービルは要塞だからな》

「これがテロだった場合はビル内の人質を楯に救出が遅れるね」

《まったく。三〇時間以内にイーストの電気が普及しなければ、私の生命維持装置の予備電源がストップする》

「あらら、それは大変」

まさに人事のようにいった夏凜は、ケータイの通話を切った。真が役に立たないとなると話していても時間の無駄だ。

連絡通路には多くの人を取り残されていた。

イーストビルとウエストビルは、店舗の内容がまったく異なるために行き来する人は少ない。それでも昼時となると、イーストからウエストへの移動人数が増えるのだ。今はまさにその昼時であった。

先ほどから連絡通路にいる人の人数が増えてきたように思える。きつとここにある緊急用エレベーターが目当てだろう。

「エレベーターは止まつてるってゆーの」

夏凜は小声で吐き捨てて、人ごみを縫うように辺りをうろちよろしはじめた。すると、その背中に何者かが声をかけた。

「夏凜様」

呼ばれて後ろを振り向くと、そこにいたのは機械人形アリスだった。

「やつほく、アリスちゃんにこんにちわあ。こんなところで会うなんて奇遇だね！」

急にテンションを上げて夏凜はアリスに駆け寄った。夏凜の外面はかなりいいのだ。

駆け寄って来た夏凜にアリスは横にいる青年を紹介した。

「こちらにいらっしやるのは草太様です。この方に帝都の観光案内をしている最中でございます」

「観光案内？」

頭にハテナマークを飛ばす夏凜を察して、アリスがすぐに補足する。

「バイト中でございます」

「アリスちゃんがなんでバイトなんかしてるのお？」

「マスターの元で奉公しているだけでは、お金は溜まりませんから」

「マナちゃんにお小遣いとかももらえないの？」

「必要以外のお金は一切くださいませ」

「アリスちゃんも大変なんだねえ。よかつたらアタシのどこ来ない？ 給料ちゃんと出してあげるよ」

世間話をする二人の間に草太が割って入った。

「そんな話しないで早くここから脱出しようぜえ」

一瞬に素を見せて夏凜は草太をにらんだが、周りに気づかれ

る前に笑顔になった。

「逃げれるもんならとづくに逃げてるよ。緊急用エレベーターは作動してないし、両方のビルもシャッター下りてて入れないしさあ」

「そんじゃさ、完全に出れないってことかよ？」

「そうなるかなあ」

笑って答える夏凜から顔を逸らして、草太はアリスの方を振り向いた。

「どうにかなんないの？」

「どうにもなりませんわ」

アリスは首を横に振るだけだった。

ケータイの着信音が鳴った。流行のバンドの曲だ。ケータイは夏凜のもので、彼はナンバーディスプレイを見てケータイに出た。

「もしもし、もう話すことないけど」

《助けに来て欲しい》

通話の相手は真だった。

「なんで助けに行かなきゃいけないの？」

《ただでとは言わん。取って置きにモノをやるう》

「モノってなあに？」

《でどうだ？》

真の提示したモノを聞いた夏凜は顔を紅潮させて、ついでに鼻息まで荒くしてテンションをマックスにさせた。

「いくいく、助けに行っちゃう！」

夏凜をここまでにさせるモノとはいったいなんだったのだからか？

《地下一階にある主電源を入れて欲しい。そうすれば、イーストの内部システムにアクセスが可能になり、おまえも脱出できることになる》

「オツケーオツケー。でもさあ、アタシここから出られないんだけど？」

《主電源がある地下一階は、連絡通路のあるエレベーターから行くことができる。そこから頑張って行くんだな。とにかくイーストに電気を取り戻してくれたら、さっき言ったモノをやる》

「絶対いく。絶対に助けに行ってみせるから。それじゃね、バイバイ」

通話を切った夏凜はすぐさまアリスの顔を子猫の顔で覗き込んだ。

「アリスちゃん、お願いがあるんだけどお」

「何でございますか？」

「イーストビルが停電で困っている人がいるの。今からブレーカーを上げに行くんだけど、アリスちゃんも来てくれたらうれしいなあ」

「バイト中でございます」

「イーストの電源を入れれば、情報屋の真クンがイーストの内部システムにアクセスしてイーストの防御システムを解除してくれるんだけどお？」

「そういうことでしたら、協力させていただきます。草太様はここで待っていてください」

「うん、わかった」

草太をこの場に残してアリスと夏凜は地下一階に向かった。

連絡通路に設置されているエレベーターはふたつ。片方の前に立ったアリスは辺りにいる人たちに声をかけた。

「今からエレベーターを爆破いたしますので、遠くに離れていてください」

こういったとたん、辺りから反発の聲が上がった。

「エレベーターを壊すなんてとんでもない！」

「緊急用のエレベーターを壊したら脱出できないじゃないか！」

動かないとはいえ緊急用のエレベーターだ。そこに望みを託している人もいる。それを壊すなんてとんでもないということだ。

しかし、そんな輩の前に、夏凜が立ちはだかった。

「てめえら、うっせーんだよ！！ 今からビルのシステムを普及しに行くんだよ。なんか文句あつか！」

怒号を撒き散らす夏凜に、周りの人たちは圧倒されて静まり返った。

蒼ざめる人々の顔を見て、夏凜が冷静を取り戻して取り乱した。

「……な〜んちゃって、テヘッ」

お茶目に笑って見せる夏凜だが、本性を出してしまったあとではもう遅かった。人々は明らかに夏凜から距離を置いている。周りから人がいなくなつたのを見計らつて、アリスがコードを唱える。

「コード000アクセス 三〇パーセント限定解除。コード003アクセス コメット 召喚^{コール}」

ロケットランチャーを召喚させたアリスは、それをエレベーターの入り口に向けて構えた。

次の瞬間、轟々と爆音を鳴らしながらエレベーターのドアは破壊された。

巻き起こる硝煙の中で、夏凜は口を押さえて咳き込んだ。

「げほげほっ、撃つなら合図してよお」

「夏凜様なら平気かと思ひまして」

「平気は平気だけどさあ」

硝煙が収まってきたところで、夏凜は破壊されたドアの中を覗き込んだ。

下を覗き込むと、奈落にまで通じていそつな闇がどこまでも続いている。下に五〇階もあるのだから、闇が濃いのも当然だろう。

目の前にはエレベーターを吊るしているワイヤーが見える。これを伝えれば下に降りれるだろうが、そんなめんどくさいことはしない。

「アタシ先に行ってるね」

夏凜は背中越しにアリスに手を振ると、闇の中にジャンプし

た。

ゴスロリのフリfrisスカートを股のあたりで両手で押さえて、夏凜が闇の中を落ちていく。自分の重さを限りなくゼロにさせることのできる夏凜は、高いところから落ちても平気なのだ。

夏凜が落ちる中、上を見上げると、発光物体が急降下しているのが見えた。ウイング を装着したアリスだ。

水鳥の羽根のように、ふわりと夏凜は落下した。すぐにアリスが追いつき、ウイング の放つ光によって辺りが明るく照らされる。

どうやら、エレベーターの箱の上にいるらしいことが辺りを見回してわかった。となると、まずは箱の中に入る必要があるだろう。

夏凜は足元にあった小さな扉を開けて箱の中に侵入した。すぐにアリスが追ってくる。

「アリスちゃん、ここ何回だと思う？」

「先ほど一階の扉を見ましたので、おそらくここが地下一階だと思われませう」

「それじゃあ、その扉を開ければオツケーだね。アリスちゃん、そのドア壊して」

「爆発に備えてください」

「オツケー」

店員三二名の大エレベーターの隅で夏凜は壁に顔を向けてしやがみこんだ。

再びアリスが コメット を召喚する。

「コード003アクセス コメット 召喚^{コール}。発射いたしま
す」

発射された弾はドアを爆砕し、爆音と硝煙が辺りを包み込んだ。

次の瞬間、硝煙の向こう側から銃声音と共に弾丸がエレベーターの中に乱射された。

「わおっ、手洗いお出迎えだこと！」

声をあげた夏凜のすぐ横を銃弾が掠める。

銃弾はアリスの身体に当たるが、外側のやわらかい人工皮膚を貫くことはできても、内部の硬い装甲の前で止まる。

「修理代がまたかさんで、マスターに小言を言われてしまいま
すわ」

アリスは露骨に嫌な顔をして、後ろにいる夏凜に命じた。

「夏凜様わたくし後ろへ！」

「オツケー」

「コード002アクセス シールド 召喚^{コール}。シールド
01変形^{ゼロロン}」

アリスの手に召喚された小型の半透明シールドが、小型からアリスを覆い隠すほど大きく変形した。

硝煙の向こうから、なお銃弾を浴びせられるが、その銃弾はすべてアリスのシールドが弾き返してしまった。

やがて、硝煙が収まると共に、銃弾の雨も収まった。

夏凜はアリスの肩越しに半透明の盾の向こうにいる人物を見た。人数は六人。スーツ来た五人が並んでこちらに向けて銃を

構え、その後ろに格上らしい男が立っている。

並んでいるスーツ男たちを掻き割って、後ろにいた男が前に出た。

「氷の花 がこんなところでなにをしている？」

氷の花 とは裏社会での夏凜の通り名だ。

「それはこっちのセリフ、エッグボマー」

「俺の名前を知ってるとは、光栄だな」

夏凜たちの前に立つ痩せこけた長身の男の通り名が エッグボマー なのだ。

無精ひげを生やした顔は痩せこけ、よろよろのコート姿の冴えない中年の容貌とは裏腹に、その実態は爆弾魔として女子供を大量に殺してきた指名手配犯なのだ。

「仕事で俺たちじや邪魔しに来たのか？」

エッグボマー は咳き込むように口に手を当てて尋ねた。

それにアリスの背中に隠れる夏凜が言葉返す。

「たまたまビルに閉じ込められただけ。それより、あんたはこんなところになにしてるの？」

「そいつぁー言えねえな」

「ま、あたしには関係ないしー、言わなくていいよ。アリスちゃん銃を持つてるやつらは任せたから！」

夏凜が突如大ジャンプをして エッグボマー に飛び掛かった。その手には異空間から召喚した大鎌が両手で握られていた。迎え撃つ エッグボマー は嗚咽をしたかと思うと、口の中から白い卵状の物体を吐き出して夏凜目掛けて飛ばしたではな

いか!?

飛んでくる卵を夏凜は空中で身を翻しながら避けた。的を外れた卵は天井に辺り大爆発を起こす。卵に見えたものは爆弾だったのだ。

爆弾魔 エッグボマー は体内で爆弾を製造できる特殊能力者だったのだ。

スーツ姿たちの銃は夏凜に向けられていた。しかし、その標的はすぐにアリスへと変わる。

「コード000アクセス 七〇パーセント限定解除。コード007アクセス メール 装着。コード004アクセス

レイピア 召喚^{コール}」

すでに シールド を小型に戻していたアリスは、身体のラインを浮かび上がる白いボディーツを装着し、レイピアを構えて男たちに向かって速攻を決めた。

アリスに向かって銃弾が放たれるが、アリスの装着したメイル はそれをもともせず弾き返す。

ぐおん!

風を切ってアリスの レイピア が投擲された。

レイピア はアリスの手を離れ加速し、男の断末魔と共に、並んでいた二人の男を串刺しにした。

残るスーツ男は三人。

アリスはすかさず召喚する。

「コード013 シザーハンズ 装着」

右手に嘴型の鉤爪を装着したアリスは一人の男を挟るように

攻撃し、その男がコンクリの地面に倒れる前に次の攻撃に移っていた。

装着されていた鉤爪の嘴が開き蒼色に輝く魔導弾が発射された。

発射された魔導弾は男の腹に丸い大きな風穴を作り、もうひとりの男は頭部を吹き飛ばされた。あどけない顔をして、アリスの戦い方は容赦なかった。

夏凜と エッグボマー の戦いは夏凜の優勢を決めていた。しかし、夏凜は決定打となる一撃を与えられずにいた。

エッグボマー の爆弾は触れたとたんに爆発するため、避けることしかできない。一度に複数の爆弾を吐き出されたら、避けることに精一杯で攻撃をくらわすことができないのだ。

大鎌を構えなおして夏凜は エッグボマー に攻め込んだ。

案の定、 エッグボマー の吐き出したエッグボムが夏凜に向かつて飛んでゆく。それを紙一重で躲し、夏凜は踏み出した足を踏ん張ると、大鎌をブーメランのように投げた。

風を切りながら回転する大鎌に向かつてエッグボムが吐き出される。

大鎌はあえなくエッグボムに爆砕され、あたりに硝煙が立ち込めた。その刹那、煌きと共に紅い筋が走り、 エッグボマー の首が胴体からずり落ちたではないか!?

「あゝあ、一本いくらすると思ってるの」

頭を失った エッグボマー の前には、大鎌を構えた夏凜が

立っていた。

あのとき夏凜は、大鎌を匣にしてわざと相手に破壊させ、立ち込める硝煙を目隠しとして利用したのだ。そして、硝煙の中で異空間にストックしてある新たな大鎌を召喚したのだ。

「三五〇万でございます」

あっさりとアリスが答えた。すでにアリスは他の敵を片付けていた。

「安いほうのやつでよかった」

三五〇万でも安いらしい。他の大鎌はいくらするのだろうか？

夏凜はコンクリの地面に転がっている大鎌の刃の部分だけを見つけ、それを力を込めて持ち上げて異空間の倉庫に収納した。「柄の部分は壊れちゃったけど、刃だけ無事でよかった。柄だけの修理なら安く済むもんね」

「それでも浮遊樹の木材は高級品でございますから、一〇〇万以上はかかると思います。夏凜様のお使いなってる天然物の浮遊樹は、最近レートがだいぶ上がっているようです」

「やだやだ」

と言つて、夏凜は目の前に突っ立っている屍体を足の裏で蹴っ飛ばした。どすんと音を立てて首のない屍体は倒れ、極め付けに夏凜は転がっていた頭部を思い切り蹴っ飛ばした。

放物線を描き飛んだ頭部などには眼もくれず、鈍い音が地下室に鳴り響く中、夏凜はにこやかにアリスに微笑みかけた。

「ひと段落したし、さっさとプレーカー探しに行こう」

「承知いたしました」

夏凜が今した行為などなかったのようにアリスは応じ、二人はブレイカーを探しに地下室を散策することにした。

ブレイカーは程なくして見つかり、ブレイカーを上げるが目に入る変化はない。この場所はメインシステムにより、もともと電気などが稼動していたため、ブレイカーを上げても本当に稼動したのかわからない。

夏凜のケータイの着信音が鳴った。ナンバーディスプレイを見ると、真からの通話だ。

「もしもし、ちゃんと電気ついた？」

「稼動を確認した。内部システムにアクセスしている途中だ。」

「これから順にセキュリティシステムを解除していく」

「どのくらいで解除できそう？」

「内部システムにアクセスするのに一〇分。セキュリティシステムの解除はたいしたことはない」

「そんじゃこれから行くねー」

通話を切った夏凜はアリスに顔を向けた。

「五〇階まで運んでくれる？」

「承知いたしました」

空を飛べない夏凜はアリスに抱きかかえながら、さきほど通ってきたエレベーターの通路を上がることにした。

五〇階の連絡通路に再び戻ったアリスは辺りを見回した。

人々の様子になんら変わりない。イーストビルのセキュリティ

イもまだ解除されていないみたいだ。

「草太様の姿が見当たりません」

アリスが夏凜に向かって呟いた。

「なんか人の数増えてるし、どっかに紛れてるんじゃないの？」

この場所が集まってくる人々の数は増えているようで、草太が人ごみの中に紛れてしまった可能性はある。

人ごみを掻き分けて草太を探すが、やはりどこにもいない。この場所にはいないとなると、階段に出てしまったのか？

モーター音が鳴り響き、歓喜の音があがる。

イーストビルの防火シャッターが上がっていく。

シャッターが完全に上がる前から人々がイーストビルの中に流れ込んでいく。

「あたしはとりあえず真クンのところ行くけどアリスちゃんはどうする？」

夏凜に投げかけながらも、アリスは辺りを見回して草太を探し続けていた。

「草太様の搜索を続けます」

「真クンが搜索の手伝いをしてくれるかもよ」

「では、真様のところへ参りましょう」

人の流れに乗りながらアリスと夏凜は先を急いだ。

イーストビル内にあるエレベーターはどれも人で込み合っている。イーストビル内でも爆発事故が起こり、停電の中に人々が閉じ込められた。一刻も早く外の空気が吸いたいというのが

普通だろう。

しかし、都外の重大事故が重大事故にならない帝都では、通常業務に戻るの早い。外に非難せずに通常業務に戻っているオフィスも多いようだ。

アリスたちは四六階につくと、真に事務所を目指した。

『Cyber Fairy』の看板が見てくる。電脳妖精という可愛らしい名前だが、この名こそが十数年前に帝都を賑わしたサイバーテロリスト 真のハンドルネームなのだ。

事務所に入り、受け付けに挨拶をしたアリスと夏凜は関係者以外立ち入り禁止の真の部屋へ入った。

灰色をした金属の壁に四方を囲まれ、配線プラグが足元や壁を這い、なにに使うのかわからない機器が並んでいる。まるで科学の実験施設のようだ。

その部屋の真ん中の椅子に真は座っていた。彼の身体は全身からはプラグや生命維持のためのチューブが伸び、頭には目元まですっぽりと覆い隠すヘルメット型のスコープが装着されていた。そして、空中にはソフトボール代の球体が二つ浮かんでいる。

謎の球体はマイクつき偵察カメラであり、そこを通して真は二人の客人を確認した。

「はじめまして、アリス。君のことはいろいろと知っている」「はじめまして真様。わたくしも真様の噂はいろいろと聞いております」

「ところで、夏凜はアレの件で来たのだろうか、アリスが一緒

なのは何か理由があるのかね？」

「連れの草太という人物がビル内で行方不明になったしまいまして」

アリスの横に立っていた夏凜がびよんと一步前に出た。

「そうそう、その子を探して欲しいんだよね。停電を直すのにアリスちゃんも協力してくれたんだよ。ねっ、だから、アリスちゃんのお願ひひとつぐらいタダで叶えてあげて！」

巻く立てるように夏凜は早口で言い、アリスも一押しした。

「お願いいたします」

「わかった、協力しよう。アリス、このプラグに接続して君のメモリーから草太のデータを転送してくれ」

地面に転がっていたプラグが生き物のように動き、出されたアリスの手に収まった。そのプラグをアリスは、うなじを掻き分けて首の後ろにある差し込み口に力を少し込めて差し込んだ。アリスの記憶装置から草太のデータが真に転送される。流れ込むデータを受け取った真はすぐさまビル内の防犯カメラなどにアクセスして人物認証を開始する。

真の脳は直接機械に接続されているため、外見上は作業をしているようには見えない。しかし、このとき真は、膨大なデータ量を高速で処理している。この処理能力は帝都政府が持っているスーパーコンピュータオメガに匹敵するのではないかと噂されているのだ。

作業は数秒で終わった。

「いないな」

「いない？」

聞き返したのは夏凜だ。

「いないってどういうことお？」

「少なくともイーस्टビルにはいない。そして、ビルの外に出た痕跡もない」

つまり、忽然と異空間に消え去ったか、それとも？

アリスが回答を出す。

「ウエストビルに入った可能性があるということでございますね？」

「その通りだ。現在あの場所は外部とのネットワークを完全に遮断している」

「ありがとうございます。では、わたくしはウエストビルの捜索に参ります。お手数ですが、草太様がイーストビルに現れた場合は、わたくしの通信システムにアクセスして教えてください」

《さうい》

《さうい》

《さうい》

《さうい》

「ちよつと、アタシも行くよ」

「お気持ちだけで結構です」

アリスは足早に部屋を出て行った。

残された夏凜はコロッと態度を変えて振り返った。

「真クーン、ところでー、報酬はいつくれるのお？」

「な、なんだとー！ あいつが真犯人だったのか!？」

「もしかしてトリップしちゃった？」

「まさか、あの執事がすでに殺害されていたとは……カボチャ男爵おそるべし」

頭にかぶった装置によつて、真は帝都のありとあらゆる情報を瞬時に検索し、映像として取り出すことができる。今もどこかにアクセスして情報を見ているに違いない。きつとドラマかアニメだろう。

「真クーン、帰還してくれるかなあ」

「なにいいいいっ！ 臨時中継だとー！」

トリップをしていた真が現実に戻った。真が見ていた映像に臨時中継が割り込んだのだ。

「臨時中継？」

「帝都政府のエージェントがウエストビルに向かっている。ほう、これは下手なアニメよりおもしろい」

「なになに？」

「ワルキューレの引きこもりオタクが現場に向かっているらしいな」

「もしかして、開発顧問のゼクスが!？」

「うむ、あいつが公の現場に出るのは珍しい。政府も人手不足なのか、現場がウエストビルだからなのか」

帝都政府のエージェント　ワルキューレ。　ワルキューレ

レはコードネームで呼ばれ、一から九番までのエージェントがいる。その中のひとり、引きこもりオタクとあだ名されるのがゼクスだ。

真によつて操作された機器が動きだし、夏凜の前にホログラム映像が投影された。映し出された映像は、帝都公園内の映像だった。

すでに規制が敷かれ、ツインタワーは関係者以外の出入りを規制し、報道陣はツインタワーに近づくことができない。それでも、鮮明なズーム機能によつて、ツインタワーの映像が配信されていた。

外から見るウエストビルは窓ガラスが全て防護壁に覆われ、それはまるで天を衝く鋼の塔であった。

ウエストビルを映していたカメラが横に振られ、空中を映し出した。その画面は徐々にズームをし、空を飛ぶ謎の物体を映し出す。

異様な物体を一言でたとえるなら　ロボット。人型のそれは、寸胴で足は短く、その割りにアーム部分は長く、手はグロームをはめたような形をしている。頭に当たる部分には半球状の物体が黒く光っていた。シルエットだけなら、まるで腕の長い土偶のようだ。

ロボットはウエストビル付近の上空で静止し、内蔵されていた巨大メガホンを両肩から出した。

「ウチの大事なウエストビルを占拠したあふぁーどもに告ぐ、

さつさと降伏せんと痛い目みるで！！」

若い女の声が大音響で当たりに鳴り響いた。騒音公害だ。

この謎のロボットは有人で、中に乗っている人物こそがゼクスだった。

乗っている機体は、古代の超科学と魔導を駆使して開発された魔導アーマー参號機。全長三・五メートルの機体には、過去と現在の科学と魔導の粋が詰め込まれているのだ。

報道によると、ウエストビルを占拠した犯人側から要求があり、その要求というのが帝都にいる服役犯を全て開放しろとの無茶な要求だった。ウエストビルにいる人質たち助けると、服役している犯罪者たちを街に放つのと、数字だけで言えば犠牲者の数は犯罪者たちを街に出すほうが遥かに多い。だからといって、ウエストビルにいる人々に犠牲になってもらうのは政治的にも倫理的にも悪い。

にしては、ゼクスの態度は交渉をしに来たのではなく、あきらかに挑発的な態度であった。

「帝都の犯罪者を解放せいなんで無茶な要求通るかあふお！

そないなことはじめつからできんと踏んで要求して来たんやろ、本当の目的を言え！」

挑発を続けるゼクスの魔導アーマーの通信機に何者かがメッセージを送信してきた。

《我々ノ目的ハ同志達ノ開放ダ。要求ニ応ジナイノデアレバ、一時間ゴトニー〇〇人ズツ処刑ヲ実行スル》

機械による合成音のため知ることはできないが、ゼクスの機

体に直接メツセージを送れる技術力を持っていることはわかった。さすがはツインタワーを占拠しただけのことはある。

《手始めに、貴様ヲ殺シテヤル》

どうやってゼクスの乗る魔導アーマーに攻撃を仕掛ける気なのか？

帝都公園内に犯人の仲間が待機しているのか？

閉ざされたビル内からの攻撃は不可能だ。

しかし、ゼクスはウエストビルから攻撃が来ると踏んだ。

ウエストビルの屋上には、空からのテロを防ぐために設置された対空ミサイルがあることをゼクスは知っていた。

案の定、屋上に設置されていたミサイルが稼動し、照準を魔導アーマーに定めた。

ミサイルが発射された瞬間、零コンマ秒の速さで魔導アーマーが變形した。

腕と脚が胴体に収納され、変わりに両腕と両肩から円柱の筒が四本飛び出した。その先端部分にはミサイルが三つずつ、合計一二発装填されていた。

コックピットで操縦桿を握っていたゼクスがスイッチを押しながら叫んだ。

「魔導ミサイル発射！」

ウエストビルから発射された対空ミサイルに一二発の小型ミサイルが真正面から向かう。

報道のカメラは地上からその映像を撮影していた。しかし、ミサイル同士が激突した瞬間、爆音がお茶の間に鳴り響き、画

面は急に閃光と煙に覆い隠されてしまった。

果たしてミサイルは？

ゼクスを乗せた魔導アーマー参號機は？

イーストビルの四六階から五〇階に上がり、アリスは連絡通路に向かった。

ウエストビルははまだシャッターが下ろされ、行き来できるのは目の前にある階段のみ。

上に行くか下に行くか。

上に何かがあるとアリスは判断した。彼女の超感覚が、人間では成し得ない計算をし、人間で言うところの胸騒ぎを覚えたのだ。

アリスは靴についでいたダイヤルを回し、魔導型ジェットブーツのスイッチを入れた。

一度の跳躍で踊り場までジャンプし、折り返しで身体の向きを変えて、次のジャンプで次の階に上がる。

階層を上げながら、アリスは周知を見渡し以上がないかを調べる。人々とすれ違い、なにもないまま階層が上がっていく。

しかし、アリスの胸騒ぎは階層が上がるごとに強くなっていった。九九階まで上がったとき、アリスは壁にもたれ掛かりながらしゃがみ込む男を発見した。ただ休んでいるのではないことは一目瞭然だった。男はわき腹を強く抑え、額から大量の脂汗を滲ませている。押さえられた手の指先からは、紅い鮮血が滲み出している。

「大丈夫でございますか？」

「……………うう……………」

口をパクパクさせるが、声が声にならない。重傷を負った男は行き絶え絶えで意識はあるものの、アリスの問いに答えることはできなかつた。

「コード011 メデイカル 召喚^{コール}」

アリスは救急医療セットを召喚し、手早く男の傷口を消毒、縫合を行い、ガーゼとテープで傷口を塞いだ。

「応急処置でございます。救急隊の手配は行いましたので、安静にしてください」

男の手術をしながら、アリスは自分の身体に内蔵された通信機で、イーストビルに待機している救急隊と連絡を取っていたのだ。

背を向けて再び階段を上り始めようとするアリスに、手術をしてもらった男が消え入りそうな声で投げかけた。

「……………上に行くな」

「ご忠告ありがとうございます」

軽く会釈をして、アリスは男の忠告を無視して上へと足を進めたのだった。

上の階に向かう途中から、アリスの嗅覚はある不快な臭いを感知していた。血の臭い。それは立ち込める血の臭いだった。

一〇〇階の階段フロアについたアリスは冷静な表情で辺りを見回した。

片方だけ残されたハイヒール。

置かれたままの鞆。

身体から血を流しながら横たわっている人々の屍体。

この場の生存者はゼロとアリスは判断した。

屍体の数はざっと一〇体。惨殺事件をこの場で起きたのは明らかだ。

しかし、なぜ？

一〇〇階は隣のビルとを繋ぐ連絡通路がある階だ。

この場には強風が吹き荒れており、不審に思ったアリスは階段を出て、連絡通路に向かおうとしたが、そこには連絡通路がなかったのだ。

ビルに空けられた穴。そこには連絡通路があるはずだった。それが無いのだ。連絡通路は何者かに破壊され、壁に開いた穴からは外の景色が眺められ、そこから激しい強風がビル内に吹き込んでいた。

アリスは階段に戻り、辺りを探索した。先ほどから目をつけていた屍体があるのだ。片腕のない不自然な屍体が。

その屍体は防火シャッターのすぐ横に横たわり、まるでそのシャッターにはさまれたように肘から先の腕が消失していた。問題は挟まれたのが生前だったのかどうかだ。この屍体にはもうひとつの外傷があった。心臓付近に開いた直径二〇センチほどの穴が、背中まで貫通していたのだ。

アリスは一つの仮説を立てて、防火シャッターの前に立った。この先に行かなければならない。問題は、この防火シャッターを壊さなければならぬということだ。

通常の防火シャッターであれば、アリスの コメット など
で破壊が可能だ。この防火シャッターが普通の物と違う点は、
その壁に幾何学的な紋様が刻まれていることだった。通常火災
以外からの“炎”を防ぐために造られたこのシャッターには、
魔導コーティングがされていたのだ。

アリスが使用する武器は動力などを魔導に頼る物が多く、口
ケットランチャーの コメット は魔導弾を発射して標的を破
壊するのだった。

もちろん魔導コーティングは全ての魔導攻撃を防ぐわけでは
ない。耐久度を越える攻撃を加えられるか、物理攻撃によつて
破壊することは可能だ。

内蔵されたエネルギー炉の残量値を計算し、アリスは悩んだ。
エネルギー残量は一〇〇〇E分の五〇〇Eほど。

この防火シャッターを壊すほどの攻撃を加えられるのはアリ
スの魔導コード メルキドの炎。この魔導は一〇〇パーセン
トの解除率で一〇〇〇Eを消費する。扉を壊すには二パーセ
ントほどの解除率で足りるだろう。しかしそれでも、二〇〇E
消費してしまうのだ。

敵の存在がどこかにいる中、遭遇時に対処するエネルギーを
残しておかねばならない。

「コード アクセス メルキドの炎 一パーセント限定起
動」

シャッターに向けられたアリスの手に燃え盛るように渦巻く
魔導が集まる。

「昇華！」

アリスの金色の髪が宙を泳ぎ、魔力を孕んだ風が巻き起こる。刹那、シャッターに向かつて放たれた業火は魔導コーティンクを魔導反応を起こし、空間を歪曲させる。

二〇〇Eでは少し魔導力が不足したか！?

しかし、アリスの計算に狂いはなかった。

硝子が弾け飛ぶような音がし、歪曲した空間が元に戻り、防火シャッターに直径一メートルほどの穴が開いた。開かれた穴の部分は、金属が溶けたように、熱を持ったまま真っ赤に光っている。

焦げた臭いに混じり、シャッターに穴が開いた瞬間、その内から嫌な臭いが流れ込んできた。この場所よりも強い血の香りだ。

穴の奥を覗き込んだアリスの表情は無表情を保っているが、その奥の光景は地獄絵図。人の山が気づかれ、床には血の海ができていた。こちら側の数倍の人数が全て屍体となってそこにはいた。

開かれた穴に飛び込み、アリスはウエストビルに進入した。着地したときに床に触れた手が紅く染まり、無表情のアリスの顔に不快の色が落とされた。

シャッター付近の屍体の山から、アリスは自分の立てていた仮説の実証に一步近づいた。シャッターは一度閉じられて、開き、再び閉じられたのだ。

イーストビルは停電に見舞われていたが、こちらは電気が通

ったままになっている。システムは稼働を続け、停電により外部システムとの切断ではなく、自主的に外部システムを遮断し、内部システムは稼働したままということを示す。

ウエストビル内はまさに地獄と化していた。歩くたびに屍体がそこら中に転がっているのだ。一〇〇階にいた全員がすでに殺されているのかもしれない。

物音を感じたアリスはゆっくりとその方向へと近づいた。帝都銀行ミナト区ツインタワービル支店。この場所にアリスは生命反応を感じたのだった。

中継カメラは硝煙の中で魔導アーマーを捜し求めた。

ウエストビルから発射されたミサイルを撃破したゼクスはすでに、ウエストビルの屋上にいた。

魔導アーマー参戦機から降り、ゼクスは強風吹き荒れる屋上で真っ赤な三つ編みを風に靡かせていた。などとカッコいいようにはいかず、床に這いつくばりながら強風に耐えるゼクスの姿がそこにはあった。

眼鏡の置くの瞳は必死そのもので、白衣が強風によって虫の羽音のような激しい音を立てる。

ゼクス背負っている赤いランドセルが自動的に開き、中からワイヤーが伸びて出入り口に飛んだ。ワイヤーの先についていた吸盤がドアに張り付き、ワイヤーをモーターで巻き上げながらゼクスは出入り口に移動した。

「カードキーは、どこやったか……？」

白衣のポケットに手をつ込んで、ゼクスはカードキーを取り出すと、屋上のドアを開いてウエストビルに侵入した。

細い廊下の途中にはいくつかのドアがある。この場所は関係者以外立ち入り禁止の管理室に続く廊下だった。

廊下の途中にあったドアが開き、勢いよく男が飛び出してきた。そしたら、いきなりの乱射だ。

機関銃を乱射され、逃げ場のない細い廊下でゼクスは一卷の終わりかと思いきや、背中に背負っていたランドセルが自動的に開き、中から二本のアームらしき物が飛び出した。

アームが持つていた銃器からカノン砲が発射された。狭い廊下でだ。凡人ならやらない行動だ。

カノン砲は狙いがどうこうということを見殺しして、大爆発を起こした。

爆風にうろたえることなく、特殊ゴーグルとマスクを装着したゼクスは管理室に乗り込んだ。

管理室には数人の男が待機していたが、ゼクスのランドセルから催涙性の煙幕が噴出され、男たちは瞬く間に眠りに落とされた。

煙の立ち込める中で、ゼクスはタッチパネルを操作し、システムにアクセスを開始した。

通常のアクセスコード入力画面で、ゼクスはマニュアルに書いていないアクセスコードを入力した。

「上上下下左右左右 B A。防御システム全解除や！」
ゼクスの入力したアクセスはショートカットキーだった。ウ

エストビルを覆っていた防護壁が一気に消え去り、防火シャッターも全て開くはずだった。

「んなあふおな」

画面に表示される『Error』の文字。

「ウチが開発したシステムやで」

低く洩らしたゼクスはしゃがみ込み、ランドセルから出てきたドライバーがボルトを外して、金属板を取り外してコンピューターの内部を露出させた。

「サイバー寄生虫やないか」

コンピューターの内部には、金属の身体を持つ小さな蜘蛛たちが巢食っていた。

サイバー寄生虫とは、人工的に造られた対コンピューター用の寄生虫で、あらかじめプログラムされた行動に従い、コンピューターのデータ改ざんや破壊活動などを行うのだ。

ランドセルの中からサイバー寄生虫用の殺虫スプレーを出し、サイバー寄生虫を一掃したがデータが元に戻るとは限らない。おそらく戻らないだろう。

「くっそ、しゃーない」

ゼクスは背負っていたランドセルを降ろした。ランドセルはオートで動き出し、プラグやらドライバーなどを伸ばし、コンピューター内部の修復をはじめ。それを確認して、ゼクスは部屋の外に出た。

秘密兵器を失ったゼクスは心もとない。と思いきや、ゼクスは余裕の笑みを浮かべながら、大股で廊下を闊歩する。小柄な

ので、大幅で歩いてても大の大人が歩くのとさほど変わらないスピードだが。

シヨップینگフロアに出たゼクスは辺りを見回して、露骨に顔をゆがめた。

「なんちゅー無残な」

割れる硝子壁や銃弾を浴びて惨殺された人の山。ウエストビル一〇〇階でまるで戦争が起きてしまったようだ。

閃光が奔った。特殊ゴーグルを装着したままのゼクスは、その閃光の中でズームイン機能&熱感知システムで人影を確認していた。

白衣のポケットに手をつ込みながらゼクスが走る。向かうは帝都銀行ミナト区ツインタワービル支店。

メイル を装着したアリスは ソード を片手に敵と交戦していた。この中に強敵はいないとアリスは判断していた。強敵とはつまり、防火シャッター付近に屍体の山を気づき上げた敵だ。その敵がここにいないとなると、まだ予断はできず、強敵に備えてエネルギーの温存をしなければならない。

アリスの メイル は敵の銃弾を弾き返し、 ソード が敵を一刀両断する。

この場に白衣の人物が乗り込んできた。

「どつちが敵や!？」

声をあげたのはゼクス。彼女はアリスとスーツの男たちを見比べて、どつちが敵かを判断した。

「柄悪そうなあんちゃんたちが敵やな！」

人を見た目で判断したゼクスは白衣のポケットから手榴弾を取り出して投げた。

爆音と煙に巻かれて、敵たちは慌てふためき、アリスはここぞチャンスと敵を一掃した。

煙の立ち込める中で、ゼクスはアリスに近づいた。

「あんた誰や？」

「主人^{マスター}マナにお遣いする機械人形のアリスと申します」

「あの社長さんのとこの娘^こかいな。どないしてこないなどにおるねん？」

「人を探しております」

「人を？」

銃声が再び鳴り響いた。

「うっさいんじゃボケ！」

怒鳴ったゼクスは白衣のポケットから黒光りする球体を取り出した。

「お止めください！」

それがなにごであるか悟ったアリスが止めるが、ゼクスの手のほうが早かった。

ゼクスの手から天井に投げられた野球のボールほどの球体は、空中で回転を始めて徐々に大きな竜巻を作り出した。

時空魔球。辺りにある物を手当たり次第に吸い込んで異空間に閉じ込める危険な武器だ。

宙を浮かぶ時空魔球に近場の物が吸い上げられる。床に横た

わつてた屍体が持ち上げられて、屍体より遙かに小さい玉に呑まれる。銀行の待合室にある椅子が持ち上げられる。

時空魔球を使用したときの鉄則は、使用したら一目散に逃げることだ。

「アリス逃げるで！」

「はい」

ゼクスを追いかけてアリスもこの場から逃げ去った。敵たちも散り散りに逃げていく。次にこの部屋に来たときには、そこら中の物が綺麗さっぱり片付いているに違いない。そして、容量を超えた時空魔球は、自動的に物を吸い込むことをやめて、宙から落ちて地面に転がるのだ。

敵をたどりつつ、アリスとゼクスは銀行奥の大金庫にたどり着いた。

「なんでやねん？」

ゼクスは眼鏡の奥で眼を丸くした。

大金庫の大扉が開かれている。六つのセキュリティーが解除され、金庫内部への道が開かれているのだ。

金庫の中に入ったゼクスはさらに驚愕した。

「中身はどこいったんや!？」

金も証券も小切手も、なにもかもない。ただ、そこには一人の少年がいた。

「草太様!？」

アリスが感情をあらわにした。行方不明になっていた草太が、

ここにいたのだ。

「惜しかった。もう少しで逃げるところだったのに」

惜しかった？

アリスには信じがたいことだったが、なにも知らないゼクスのほうが私情をはさまずに状況をすぐに把握した。

「金庫の中身をどこにやったんや！」

「ここだよ、ここ」

自分の腹を指差して、草太は不気味に笑った。まるでそれは草太ではない者の表情のようだ。

嗚咽をひとつして、草太が口の中からもなにかを吐き出した。

それは、なんと札束だった。口よりも大きいはずの札束が、口の中から出てきたのだ。

つまり、金庫の中にあつたものは、すべて喰ってしまったと言うのだ。そんなこと信じられない。だが、たしかに札束は草太が吐き出したのだ。

ゼクスの脳内情報が処理され、パズルのピースが答えを描きはじめた。

「そうか、これが目的やったのか！」

「そうだよ、犯罪者を牢から出せなんて無理なことくらいわかってたさ。時間稼ぎができればそれでよかった」

そう、犯人側の要求は帝都で服役している者たちの開放だった。しかし、本当の目的は帝都有数の大金庫である、帝都銀行ミナト区ツインタワービル銀行強盗にあつたのだ。

そして、ゼクスは草太の本当の正体に近づいていた。

ゼクスの頭に叩き込まれたA級犯罪者リストと照合し、金庫の中身を喰らうことのできる犯罪者に該当するのはひとり。

「マッドイーター やな!」

「ご名答。今回のゲームをクリアしても、S級にはまだなれないね。早くS級に名を連ねたいよ」

帝都政府が管理する犯罪者リストのA級に名を連ねる マッドイーター。 国籍も本名も、性別を含む何もかもが『不明』の犯罪者だ。全てが『不明』なのは、マッドイーターの持つ特殊能力に理由がある。

包囲網を抜けて マッドイーター が都外に逃げたとの噂があったのは、数が月前のことだった。

「外は退屈だね。やっぱり犯罪件数世界一の帝都が僕にとって一番住みよい街だった。だから戻ってきたんだ、この子の身体を借りてね」

金庫の入り口にはアリスとゼクスが立ち塞がり、マッドイーター に逃げ場はないと見える。

ゼクスが相手を追い詰めるべく、一歩前に出た。

「金庫の中身を早う出さんかい!」

「こちらには人質がいる。可笑しな真似はしないほうがいいよ」

「ウエストビルに残ってる人たちのことか!」

「ビルを倒壊させるだけの爆弾がセットしてある。僕に可笑しな真似をしたら、ごんだよ」

「そないなことしたら、お前も死ぬんやで!」

「わかつていいるよ、だから人質を消化しないで一人残して置いたんだ」

草太の口がゴムのように伸び、その口から頭が出た。それはなんと草太の頭であった。草太が草太を吐き出したのだ。いや、吐き出した者の姿はすでに草他ではなかった。

吐き出した草太を草他を吐き出した者が首根っこを掴んで持ち上げた。

「僕の能力をお忘れだったかな？」

マッドイーターの能力とは、無尽蔵の腹を持ち、その腹に収めたモノの能力や容姿などを吸収してしまうのだ。

草太を吐き出したのは、太った大柄の男だった。肉まんを重ねたような身体に、大福のような頭が乗っている。その顔からは脂汗が噴出し、たらこのような唇が歪んでいた。

マッドイーターに囚われた草太は気失っているようだった。これは不幸か幸いか？

ゼクスとアリスがマッドイーターとの距離を詰める。

「おいおい、近づくとこの子供を殺しちゃうよ」

相手の動きに合わせてマッドイーターもまた、ゆっくりとすり足で移動していた。

アリスの瞳がマッドイーターを見据える。

「人質は生きているから意味があるのですよ？」

「その通り。もし、ここで僕がこの子供を殺したら、君たちはすぐにでも僕に牙を剥くだろう。けどね、僕は馬鹿ではないよ」

なんと、この場で巨大な口を開いた マッドイーター が、再び草太の身体を丸呑みしたのだ。

「これで僕を殺せば、人質も死ぬよ」

再び草太を呑み込み草他の姿をした マッドイーター は、ゼクスとアリスとの間合いを確かめながら出口へと足を進めていた。

仕掛けるのは誰か？

「コード アクセス 影縫い ！」

発動された魔導コードによつて、アリスの手から影色をした針が放たれた！

針は マッドイーター ではなく、その影を狙っていた。

影縫い とは相手の影を固定し、本体の動きを封じる技だった。本体を傷つければ影も傷つき、影を傷つければ本体も傷つくという原理に基づくものだ。

マッドイーター は素早い身のこなしで影針を避け、そのまま出口に走った。

「逃がすか！」

ゼクスが手から電子ロープを放った。

放たれた電子ロープは マッドイーター の片足を捕らえた！

足首にロープを巻かれ、マッドイーター が体勢を崩して大きく転倒した。だが、次の瞬間、マッドイーター の口が開かれ、そこから草太の身体を遥かに超えるデブ男が飛び出した。電子ロープに捕まった草太の身体を捨て、デブ男 マッ

ドイーター はそのまま逃走を続けた。

その巨軀からは想像できないスピードで逃げる マッドイーター をゼクスとアリスが追う。

巨体についた肉を揺らしながら マッドイーター は逃走を続けた。仲間たちはすでにアリスとゼクスに殲滅させられ、残っているのは自分だけだ。銀行で盗んだ金を全て独り占めのできる。しかし、マッドイーター の本当の目的はそれではない。

これはゲームなのだ。ミッションをクリアし、経験値を稼ぎ、犯罪者としての階位クラスを上げる。それが マッドイーター の目的だった。

後ろからはアリスとゼクスを追ってくる。ウイング を装着したアリスのスピードもさることながら、ゼクスの走るスピードも人間離れしていた。

だが、マッドイーター の移動スピードもまた常人を遙かに逸脱したものだ。マッドイーター が喰った被害者はすべて把握されていないが、その中に俊足を持つ能力者のかもしれない。

マッドイーター は逃げつつも、追っ手を撃退するべく攻撃を仕掛けていた。

階段を駆け上がりながら後ろを勢いよく振り返った マッドイーター の口から粘液が飛ぶ。

糸を引く粘液はアリスの顔の横を通り過ぎたが、粘液の付いた床は熱で溶かされたよう湯気を立てて溶解した。 マッドイ

「ター」の吐き出した粘液は強い酸を含んでいたのだ。しかも、鼻が捻じ曲がりそうな悪臭を放っている。

階段の折り返しで、マッドイーターの姿が消え、すぐにゼクスが追うが、床の滑りに足を取られて転倒してしまった。

「なんやねん!？」

尻餅を付きながら床を見ると、床は油を塗りたくったように不気味に輝いていた。マッドイーターがトラップとして自分の脂汗をばらまいたのだ。

「くっそ〜！」

尻餅を付きながらゼクスが階段の上を見上げると、すでに空を飛んでいるアリスが屋上に入ろうとしているところだった。

立ち上がったゼクスは階段を上るのではなく、来た道を急いで戻った。ピルのシステムコンピュータを修復するために使っていたアレを取りに戻ったのだ。

敵を屋上に追い詰めたはずだった。しかし、屋上でアリスを待ち構えていたのは、巨大な戦闘マシーンだった。

アリスの前に立ちはだかる金属の巨体。魔導アーマー参號機。ゼクスが屋上に置いて来た魔導アーマーに、マッドイーターが乗り込んだのだ。巨体のマッドイーターがゼクス専用の小さいコックピットにどうやって乗ったのかは不明だ。

「こんなところにおもしろい玩具が落ちていたよ。逃げるのは止めにしてこれで遊ぼう」

「それは子供の玩具じゃありませんわ」

強風の吹き荒れる屋上でアリスは ウィング を解除した。残り少ないエネルギーで目の前の敵と戦わねばならない。起動しているだけでエネルギーを消費する ウィング を使うのは得策ではない。今は少しでも節約した戦いをせねば。

特殊合金の屋上の床にアリスは足の裏をしつかりとつけた。長い金髪を激しく煽られるが、小柄な身体が飛ばされることはない。少女の外見を持ちながらも、機械人形であるアリスの重量は二〇〇キログラムを超えていた。

アリスが合金の上を駆ける。重量に見合わず、その足音は軽やかだった。それというのもアリスの靴がショックを吸収してくれているからだ。

白いボディスーツである メール を装着したままのアリスは、敵に向かうべく盾と剣を召喚した。

「コード001アクセス ビームセーバー 召喚。コード002アクセス シールド 召喚」

ビームソードと光輝く半透明の盾を装備し、アリスが魔導アーマーに斬りかかる！

グオオオオン！！

巨大なアームが素早く動き、アリスに襲い掛かる。

強い衝撃を シールド で辛うじて防ぐが、その衝撃のあまり、アリスの身体は後方に大きく吹き飛ばされた。

後方に飛ばされながらもしやがみながら着地し、そのままの体勢でアリスはジェットブーツの横についているジャンプ力調整ダイヤルを回して、スライド式の小さいスイッチを三段階の

ーに入れた。

立ち上がったアリスは爪先で走り魔導アーマーに斬りかかる。再び振り下ろされる巨大なアーム！

アリスは地面に踵を下ろして、強く踏み切った。すると、ジェットブーツが発動し巨大なアームを軽々と避け、横に大きくジャンプした。

魔導アーマーがアリスのいる方角を向く前に、アリスは着地と共に次のジャンプをした。

急いで魔導アーマーが振り返った場所にアリスはいない。アリスは魔導アーマーの頭上を飛び越え、背後に回っていた。

「コード006アクセス　ブリリアント　召喚^{コール}。発射！」
アリスの周りに六つの光り輝く球体が出現し、そこからレーザーが一斉照射された。

だが、レーザーは魔導アーマーの装甲を紅く熱するだけで破壊するには至らなかった。

背を向けていた魔導アーマーが振り返りざまにアームを大きく振ってアリスを襲う。

シールドで防ぐが、やはりアリスの身体は大きく飛ばされ、屋上に設置してあった対空ミサイルの台に衝突させられた。形勢は明らかに不利だった。いくら戦闘用のS級キリングドールと言えど、魔導アーマーとの戦いは戦闘のスペシャリストである特殊戦闘員と戦車が戦うようなものだ。いや、ただの戦闘用モビルアーマーであれば、アリスがこんな苦戦を強いられることはあるまい。天才科学者ゼクスが開発した世界最高峰の

兵器であつたらこそ、アリスが苦戦を強いられているのだ。

相手の出方を窺い、足を止めるアリスに魔導アーマーが近づく。

「アリスみたいに必殺技を使いたんだけどね、機体を操縦するのが精一杯で武器の使い方がわからなんだよ」

スピーカーを通して響く マッドイーター の声。

もし、マッドイーター が魔導アーマーの操縦を完璧にこなし、装備されている兵器を使用していたら、アリスはすぐにやられてしまったかもしれない。幸運の女神が少しだけアリスに味方しているのかもしれない。

などということもない。アリスは目の前の敵と戦いながら、エネルギー残量とも戦っていたのだ。エネルギー残量もつと残つていれば、もう少しマシな戦いができるものを、今の状態ではどうにもならなかった。

エネルギー残量は二五〇Eを切っている。先ほど撃ったブリリアント で、召喚に三E、発射に一八E消費したが、それも敵に傷を負わせることができなかった。

屋上の扉に白い影が現れた。

「またせたな！ ヒーローちゅうのはやつぱり、いいところ取り
せんとな」

白い影は白衣を風に揺らすゼクスだった。

ゼクスは魔導アーマーに向かおうと足を踏み出すが、強風に押し戻されて思うように前に進めない。

「たかが風に負けてたまるか！」

背負っていたランドセルから一枚のカードが飛び出し、ゼクススの手に収まった。

「擬似スペル　グラビティ！」

カードを自分の胸元で掲げ、ゼクスは呪文スペルを唱えた。これはスペルカードといって、あらかじめ呪文を吹き込むことによって、誰もが簡易的に呪文を使えるアイテムだ。

グラビティを自分に発動させたゼクスの体重が増え、風に飛ばされないようになった。その分、行動力に支障がでるが、ゼクスはそのハンデを物ともしなかった。

床を激しく叩きながら走るゼクスが、ランドセルから二本のレーザー砲を出し、極太のレーザーを魔導アーマーに向かって照射した。

二本のレーザーを軽々と避ける魔導アーマーであったが、レーザーの向かった先にはアリスが先回りしていた。

レーザーの一本がアリスの構えた　シールド　に反射した。反射されたレーザーが向かった先いた魔導アーマーの装甲が、アリスの弾き返したレーザーで解けた。ブリリアント　では太刀打ちできなかったレーザーだが、ゼクスのレーザーはたしかに魔導アーマーに傷を負わせたのだ。

しかし、その程度の溶解では、魔導アーマーの背中の装甲を数センチ溶かすことしかできなかった。

「あんまりいとらへんな。さっすがウチの造った魔導アーマー
参號機や」

関心している場合ではなかった。魔導アーマーが全速力で走

り、ゼクス向かって突進してきたのだ。

突進してくる全長三・五メートルの巨軀に臆することなく、ゼクスは正面を切って向かい討ちレーザーを発射した。

が、魔導アーマーはバリアを出現させ、レーザーを中和してしまつたのだ。

巨大なアームが振られゼクスの眼前に迫る。

「やられるかアホっ!!」

ランドセルから赤い超巨大グローブが飛び出し、魔導アーマーの巨軀を殴りつけた。衝撃に押され魔導アーマーは後退するが、そのグラブ部分がキャノン砲に変形し、ゼクスの頭より大きい弾を発射してきた。

ゼクスは弾を避けようとするが、避けきれず左胸から腕にかけてもろに直撃を喰らってしまった。

魔導アーマーのスピーカーから声が響く。

「電子マニュアルをご丁寧に用意してくれた助かった。やっと武器を使用する仕方がわかってきたよ。しかし、実に操作が難しいね。まるで立体パズルじゃないか」

魔導アーマーのその先で倒れていたゼクスがゆっくりと立ち上がった。

「……つウチとしたことが計算ミスや」

失笑を浮かべるゼクスの左半身は衣服が焼け焦げ、肉が剥がれ落ちていた。だが、そこにあったのは白い骨ではない。鋼色に輝く機械の身体だった。

金属の身体は先ほどの攻撃で穿たれ破損し、内部をさらけ出

して火花を散らしていた。

「立ち上がったのはいいけど動けへん」

ランドセルから修理システムのドライバークォードが飛び出し、破損したゼクスの身体を修理しはじめる。

ゼクスは自分の身体の修理をさせながら、ランドセルから出たままになっているレーザー砲を魔導アーマーに向けて放つ。

真正面の攻撃を避けられないわけがない。

しかし!?

「なに!？」

スピーカーから動揺の声が漏れた。

魔導アーマーの身体が思うように動かない。理由はその影にあった。なんと魔導アーマーの影にアリスの放った影針が刺さっていたのだ。

身動きを奪われた魔導アーマーは二対のレーザーの直撃をもろに喰らい、すかさずアリスが魔導アーマーに飛び掛かった。

かろうじて動く魔導アーマーのアームがアリス目掛けて振られるが、アリスはその腕に自ら飛び込んだ。

「コード アクセス メルキドの炎 一パーセント限定起動。昇華！」

全てを焼き尽くす天の業火が魔導アーマーの身体を包み込む。装甲に覆われていたアーマーの表面が熔ける。だが、これも致命傷にはならず、魔導アーマーの影に刺さっていた影針を焼き尽くし、魔導アーマーに自由を与えてしまう結果になった。

真っ赤に色付く魔導アーマーが奇怪な悲鳴をあげながら、ア

リスの頭上に覆いかぶさるように襲い来る！

「コード009アクセス　　イリユージョン　起動」

巨大な塊に押し掛かれたアリスの身体は押しつぶされ、空間の中に溶けるように消えた。

イリユージョン。

イリユージョンによって分身したアリスの本体は、高温を発生する魔導アーマーの紅い脚に抱きついていた。

「コード〇〇八アクセス　　シヨックウエーブ　発動」

超強力な電磁パルスが魔導アーマーの身体に走った。

火花を散らしながら魔導アーマーが奇怪な音を立て、そして身動きを止めた。ついに魔導アーマーを仕留めたのだ。

アリスの戦いぶりを見ていたゼクスは感嘆した。

「普通の電磁攻撃で倒せる魔導アーマー参號機やない。装甲を溶かしたのが利いたんや」

戦いを終えたアリスのボディーツは酷く焼け焦げ熔解し、美しい金髪も半分以上溶けてしまっていた。

アリスの思考回路がノイズを発生し、膝から床に崩れ落ちるアリスのすぐ横で、魔導アーマーのハッチが開いた。

「危ないところだった。これに乗ってなければ死んでいたよ」

ハッチを開け、太った巨漢が脂汗を垂らして這い出て来た。

搭乗していた　マッドイーター　は無傷でいきいていたのだ。

逃げようとする　マッドイーター　を見ながらもゼクスは未だ動けず、アリスのシステムもショート寸前だった。だが。

「コード004アクセス　　レイピア　コール召喚」

槍を召喚したアリスは、それを力いっぱい背を向ける マッドイーター に投げつけた。

「ぐあっ!？」

投げられた レイピア は マッドイーター の腹を勢いよく貫通し、腹に開いた大穴に強風が吹き込んだ。

「まさか……まさか……この僕が……」

腹を押さえよるめきながら、 マッドイーター は屋上を囲うフェンスに激突した。

巨軀に体当たりされたフェンスは、その体重を支えきれず大きな音を立てて外れてしまった。

屋上に吹き荒れる風。

巨大な身体が死のダイブをした。

絶叫は風にかき消されたか、アリスたちの耳に届くことはなかった。

遙か地上一〇〇階から落下した肉塊は地上に叩きつけられ、水のように跡形もなく弾け飛んだ。デブ男は死んだのだ。

ようやく修理を終えたゼクスが床に倒れるアリスに駆け寄った。

「しっかりせい！」

「バッテリーを取り替えてくだ」

言葉を最後まで発することなく、アリスのシステムは停止した。エネルギーを全て使い切ってしまったのだ。

「ウチの研究所で修理するから安心せい。にしても、魔導アーマー参號機がやられてしまうたな。改良の余地ありやな」

ゼクスはアリスの応急処置をしながら、救助のヘリが来るのを待つことにした。まだウエストビルのシステムコンピュータの修理も終わっていなかった。

ツインタワーでビルがあつた次の日、アリスは再びツインタワービルに訪れていた。

ウエストビルの営業は今日も行われ、事件の次の日だという客もそこそこ入っている。

あちらこちらで壊れた店内が立て直される中、事件のせいで辞めてしまった人々の変わりに、すぐにバイトの募集が行われていた。アリスもそのバイトに応募し、すぐにでも履歴書を持って来るように言われたのだ。

稼動している乗り込むいつも以上の込み具合で、アリスは人の波に押されてエレベーターの奥へと追いやられた。

満員のエレベーターの中で身動きできないアリスの胸に、後ろから何者かの手が回された。痴漢かもしれないと思いアリスは振り向こうとしたが、その前に何者かの顔がアリスの耳元に近づいた。

「後ろを向いちゃダメだよ。エレベーターに乗ってる全員が人質だ」

それはアリスにしか聞こえない小さな声だった。

「アリス……僕は美しい君のことを手に入れたくなかった。けれどね、さすがの僕でも“機械”を喰うことできない」

まさか!?

しかし、マッドイーター はあの時に死んだはずでは？

エレベーターが止まり、人の流れに乗ってアリスの真後ろに立っていた謎の男が降りて行った。

そして、エレベーターを降りる寸前、スラリと伸びた長身の身体をを少し傾け、端整でな顔立ちを静かに向け、優しく微笑んだのだった。

アリスはその場を動かず、エレベーターの扉は固く閉ざされたのだった。

荒波の旋律

下界を焦がし燦然と照り輝く真つ赤な太陽。

さざ波の聴こえる白い砂浜。

サングラスに真つ赤なビキニを着た金髪美女がビーチチェアで寛いでいた。

白い肌には日焼け止めがたっぷり塗られ、日焼けを決して許さない。

その傍らに立つメイドの少女。その肌は炎天下で、主人の肌よりも白く、陶器のように透き通っている。

ビーチチェアに寝そべる美女が退屈そうに呟く。

「飽きたわ」

ビーチには二人以外ない。プライベートとビーチというわけでも、無人島というわけでもない。

季節は極寒の冬なのだ。

サングラスを外して立ち上がった美女は魔導士マナだった。

傍らに立つのは機械人形の少女アリス。

「マナ様、そろそろ人口太陽が切れます」

先ほどよりも太陽が色あせている。まるで切れそうな電球のようだ。

そして、人口太陽は海へと墮ちた。

急に極寒が肌を刺す。

マナはすぐに水着の上から魔導衣を着ると、砂浜を出て道路に向かつて歩いた。道路には真つ赤なスポーツカーが止まっている。さっさと帰る気なのだ。

ビーチにはパラソルとチェアと、アリスが残されていた。スポーツカーが走り去っていく。

そろそろ主人に反逆したいと考えているが、アリスのプログラムで抑制され、反逆をしようとしても嫌がらせ程度しかできない。

アリスにはビーチチェアとパラソルを片付ける気など毛頭ない。

電話に備え付けてある通話機能で便利屋を呼ぶ。

「わたくしアリスと申します。ビーチパラソルとビーチチェアを処分したいので、海岸に引き取りに来てもらえないでしょうか？」

声に出さずに電腦から直接音声データを飛ばす方法だ。

通話に出たのは中年声の男だった。

「毎度、アリスちゃん。いつもひいきにありがとな、すぐに引き取りに行くぜ」

「ありがとうございます」

通話を終えたアリスはこの場で待つことにした。

たかがゴミの処理でも便利屋は快く引き受けてくれる。要は仕事に見合う料金を客が支払ってくればなんでもするのだ。

便利屋が来るまで海岸を眺めていたアリスの瞳に男の姿が映った。

海の上に仰向けになって浮かぶ男性の姿。生体反応はあるが、体温が低い。

波打ち際まで駆け寄ったアリスから男までの距離は五メートルほど。

アリスのボディは防水加工が施されているが、万が一の事もできるのであれば海水には浸かりたくない。

エネルギー残量と相談し、アリスは ウィング を起動させることにした。

「コード000アクセス 五〇パーセント限定解除、コード005アクセス ウィング 起動」

アリスの背中が金色に輝き、そこには鳥の羽骨のような翼が生えた。

翼は小さなフレアを撒き散らし、重力に逆らうようにゆっくりとアリスの身体を浮かす。

アリスは男の上空まで飛んだ。そこから波の動きを読みながら、海に浸からぬようにしてタイミングを見計らって、一気に男の服を掴んで持ち上げたのだった。

服が小さく破けるような音を立て、アリスは慌てて速度を上げて飛び、気を失っている男を砂浜に投げ捨てた。

丁寧さに欠くのは、アリスが元々メイド用ではないからだ。エネルギー消費量の多い ウィング を解除し、アリスはすぐさま男のもとに駆け寄った。

砂浜で身動きしない男を仰向けにした。男の年齢は二〇代半ば、服装はタキシードと、冬の海で溺れているには不自然な格

好だった。

アリスはすぐさま男の呼吸と脈を確かめたが、呼吸がない。人工呼吸をしたいところだが、生憎アリスには肺がなく呼吸をしていなかった。これでは人工呼吸はできない。

「コード011 メディカル 召喚」

アリスが召喚したのは緊急医療セット。そこからアリスがチヨイスしたのは電気痙攣療法の器具。いわゆる電気ショックだ。男の黒いジャケットの下にしているワイシャツのボタンを外し前を開けると、二つの電極を手にとって男の胸に押し付けた。電気の流れた男の身体が大きく飛び跳ねた。

目覚める気配のない男に二発目をお見舞いした。

再び跳ね上がる男の身体。

男の瞼が痙攣したように動き、口を動かして急に呼吸をする男は目を開けた。

それを見てアリスが漏らす。

「適当にやったのだけれど、なんとなくで上手くいくものね」

メディカル は後付された機能で、アリスはその使い方を知らなかつたのだ。

上体を起こした男は辺りを見回し、アリスの顔を不思議そうな顔で見つめた。

「なぜこんなところに？」

「海で溺れているところを救いました」

「……そうか、ありがとう……僕の名は……僕の……」

男は急に難しい顔で押し黙ってしまった。

「どうかいたしましたか？」

「名前が……名前が……思い出せない」

「お名前が？」

「そう……自分の名前が思い出せない。名前だけじゃない、住んでいた場所も、両親の名前も顔も、なにもかも」

苦悶する男にアリスは瞬時に判断をする。

「記憶喪失でございますね」

「そんな馬鹿な、僕はこうやって普通に話しているじゃないか？」

「しかし貴方は、ご自分の記憶を失われております」

「それもそうだが……」

男は自分自身が置かれた状況に半信半疑のようだ。まさか自分が記憶喪失になるとは誰も思わない。突然のことに男は理解を苦しんでいるのだろう。

頭を抱える男にアリスは提案をする。

「警察に行くのが一番でございます」

「警察……警察……警察には行かないほうがいいような気がする」

「貴方は犯罪者でございますか？」

「そんなまさか……でも、とにかく警察には行きたくない。病院もだ」

「ご自分の状況を理解なされての発言でございますか？」

男は再び押し黙った。

記憶がないのにも関わらず、警察と病院を拒否する。なにか

足が付いてはいけないようなことをしたのだろうか？

アリスは疑問を抱きつつも、男にこんな提案を持ちかけた。

「お金を持つておられるのなら、ひとまずホテルを探すのが宜しいかと思えます。記憶を探す手伝いや身の回りのお世話は、報酬さえいただければわたくしが致しますが？」

「君が？ 君はどこかの主人に仕えるただのメイドアンドロイドじゃないのかい？」

「有力者に仕える機械人形アリスでございます。それにメイドアンドロイドではなく、殺^{キリング}人形でございます」

「あははは、こんな可愛らしいお嬢さんがキリングドールか。いくらくらいでキミを雇えるんだい？」

「日給五万円ほどでいかがでございますか？」

「雇ってもいいけど、問題は僕がお金を持っているかだな……」

男はポケットをまさぐり、革の財布を取り出した。

財布の中には札も小銭も入っていなかったが、キャッシュカードなどのカード類が大量にあった。

カードの中にはアリスの知っている物もいくつかあった。

「銀行のキャッシュカードが混ざっておりますね」

「そうだね……預金があれば君の給料や当面の資金が確保できそうだな」

「では、まずはATMを探しましょう」

「そうだね」

「その前に……」

「その前に？」

「もうすぐ便利屋があれを処分に来ますので、それまでお待ちくださいませ」

アリスが手を向けた先には、主人が残っていた「粗大ゴミ」が置いてあった。

コンビニでATMを探し、男は三〇万円を引き出した。

店外で待っていたアリスに男は歩み寄り、引き出したばかりのお金から五万円を手渡す。

「これが今日の分だよ」

「ありがとうございます。ところで、日給五万円はわたくしの働きには見合う金額ですが、個人の貴方が支払うには多い金額だと思われませう。預金には余裕がございましたか？」

「君はなかなか有能そうだから五万円でも安いと思うよ」

「そうではなくて、プライバシーにあまり立ち入る気はございませんが、わたくしに日給を払う余裕がございましたか？」

「ああ、僕の預金額が気になるわけだね……僕はすいぶんとお金持ちらしいよ。6つの口座を調べたけど、全て預金が五〇〇〇万以上」

若干二〇代かそこらで三億以上の預金額。ただのサラリーマンだという線は薄い。ただし見た目の年齢は美容技術進歩で必ずしも実年齢とイコールにはならない。

現金を持って二人はメインロードから少し外れた安ホテルを探した。

鉄筋コンクリートの小さなビル。一泊一万五〇〇〇円からと書いてあった。

「別にホテルはどこでもいいからここにしよう」

男に促され、アリスはホテルのロビーに入った。

小さなカウンターには備え付けのアンドロイドがいた。

「当ホテルにようこそお出でいただきました」

合成音は人間のようには滑らかではなく、旧式を思わせる。

チェックインを済ませようとして男はアリスに尋ねた。

「アリス君はここに泊まるかい？ それとも本当のご主人のところに戻るかい？」

「五日間ほどなら、貴方様と常に行動を共にできます」

「そんなことをして君の主人は怒ったりしないのかい？」

「勝手に怒らせて置けばいいのです。わたくしがいなくとも、主人の自由気ままな生活には小さな支障しか出ません」

ささやかな仕返しだった。

男は目の前の受け付けアンドロイドで二人分のチェックインを済ませた。高性能アンドロイド等は一人分とカウントするのが一般常識だ。ただし食事などのサービスが含まれる場合は、その料金分が差し引かれる。

部屋の鍵を受け取り、二人でエレベーターに乗っている途中、男はずっとアリスの顔を見つめていた。それに気づいたアリスはいかにも不思議そうな顔で男を見返す。

「どうかいたしましたか？」

「君って本当にアンドロイドなのかい？」

「正確にはアンドロイドではございませんが、人工物でございます」

端整な顔立ち、染み一つない陶器のような美しく白い肌、全く潤んでいない蒼い瞳。見た目は人工物以外の他ならない存在だ。ただ、電脳にインプットされた性格チップが良くできすぎているように思えた。あまりにも人間味を帯びていているのだ。エレベーターのドアが開き、二人はまっすぐの廊下を進んだ。廊下には人はいないが、いろいろな場所から人の声やテレビの音らしきが聴こえる。どうやらずいぶんと壁の薄いホテルらしい。

渡された鍵の部屋に入ると、小奇麗にはしてあるが、とても素っ気無い部屋だった。ベッドの数は一つ。二人分の料金を払っても、この辺りは一人分なのだ。

部屋に入った男はさっそくシャワールームに向かった。

「体中ベトベトだ早くシャワーを浴びたいよ。僕がシャワーを浴びている間にこの服をクリーニングに出して、新しい服を買ってきてくれるとありがたい」

「承りました」

男はアリスの前で気にせず服を脱ぎ始めた。アリスも表情ひとつ変えていない。

全裸になった男はその服をアリスに手渡し、財布から五万円ほど出してアリスに渡した。

「これでよろしく頼むよ」

「承りました」

アリスに背を向けてシャワールームに入っていく男の背中には大きな刺青があった。

蝙蝠の羽を模った左右対称の羽と、その中心に描いてある『D C』の文字。アリスはそれにひとつしか心当たりがなかった。

だとしたら、この男は帝都政府の敵だ。

D CとはDarkness Cityの頭文字で、帝都を中心に暗躍する魔導結社の名前だった。その活動は主に帝都政府へのテロ行為。過激なものが多く、住民が犠牲になることをいとわない最悪のテロ集団だ。

帝都政府からD Cの幹部達は『デッドオアライヴ』で懸賞金つきで指名手配されている。だが、その幹部の多くは顔や経歴が一切不明の者も多く、顔がわかっている者も本当に幹部なのか怪しい部分が多い。

アリスにとって、例えば男の正体がテロリストだとしても、今は高い給料を払ってくれる雇い主でしかない。アリスには治安の安定や世界平和など興味のない話だった。

これから大きなアクシオンが起こされることは十分に予想されるが、男の刺青を見たときのアリスの表情は小さな笑みを浮かべていた。この辺りの感情が機械らしくないのだろう。

アリスはこれから起こることに期待をしているのだ。

浜辺で男を見つけたときから、なにか予感はしていた。タキシード姿の男が溺れて死に掛けていた。パーティー帰りの男が泥酔して海に落ちたという軽いオチは、男の背中に刻まれた刺

青がないと言っている。

塩水で汚れたタキシードを持ちながら、アリスはニヤリとして部屋を出て行った。

男がシャワーを浴びて出ると、白いガウンと着替えの両方が置いてあった。男は着替えに手を伸ばし、スラックスを履いてシャツに着替え、最後にジャケットを羽織った。その姿は青年実業家に見える。

着替えを済ませた男に、アリスは買い物のおつりを手渡そうとしたが、男はそれをにこやかに拒否した。

「チップとして受け取ってもらいたい」

「ありがとうございます」

数千円の残りをアリスは快く受け取った。

男が部屋の掛け時計を見ると、時間はまだ夕方の五時前だった。

「まだダイナーには早いけれど、僕はお腹が空いてしまっただけにか食べたいと思うんだ」

「一〇メートル以内に中華料理店と松屋、もう少し行ったところにコンビニがございました」

「よく覚えているね。とりあえず外に出てなにか探そう」

軽やかに部屋の外に出て行くこうとする男をアリスが呼び止める。

「お待ちください」

「なんだい？」

振り返る男にアリスはコートを渡した。

「夜になるといつそう冷えます」

「コートも買ってよくあれだけおつりが出たものだ」

「安物で揃えましてございます」

「あはは、ちょっと僕がシャワーを浴びている間にさすがだね」

「いえいえ」

謙遜するアリスの仕草は、人間のそれだ。

コートに袖を通し、男はアリスと共にホテルを出た。

街中を歩く二人は自然と人々の目を引いた。機械人形の少女を連れていることが最も大きな要因だ。

アリスの機械人形としての出来は一級品であり、人間と見間違ふほどであるが、作られたものゆえの端整さが人間でないと物語っている。工業用以外の機械人形自体が一般にあまり出回っていないこともあるが、これほどまでの機械人形を街中で連れまわす人間はまずいない。

それもメイド服を着た少女の機械人形だ。

若い男性が連れていたら、変な目で見られても文句は言えない。

ずぶ濡れのタキシードを着ていたときよりはマシだが、人々の視線を引いても男は少しも気にしていないようだった。アリスもまったく周りの目など気にせず、男の後について歩く。

この時期の街はいつも以上の喧噪に包まれていた。

立ち木はイルミネーションで彩られ、もう少し時間が経てば

一斉に輝きだす。

耳を澄ませばどこからか聴こえてくるクリスマスソング。

繁華街は若いカツプルが多く目に付く。

男はアリスに日付を尋ねる。

「今日は何日かい？」

「一二月二四日でございます」

今日はクリスマス・イヴだったのだ。

「なるほど、クリスマス・イヴか……」

「クリスマス・イヴになにか？」

「なにか頭に引つかかるんだ……なにかクリスマスにあったような気がする」

アリスには心当たりがあった。D C にとってもクリスマスは神聖な日なのだ。だが、アリスはそれを口にするにはなかった。

しばらく二人で歩き続け、男はイタリアンレストランの前で足を止めた。店内から音楽が聞こえてくるのだ。ピアノの調べが聴こえてくる。

男は誘われるように店内に足を運んだ。

まだディナータイムには早く、店は若干の空席があった。男は迷わずこの店で食事を取ることに決めた。

店内に響き渡るピアノの調べはドレス姿の女性奏者により生演奏だった。曲目はクリスマスソングのジャズアレンジ。

席についた男はアリスを前に座らせ、注文をすぐに済ませてピアノの調べに耳を傾けた。

「ピアノの音色を聴くと、なぜだか心がとても躍るよ」

男は楽しそうにアリスに話しかけた。

「もしかしたら、僕はピアノ奏者だったのかもしれないよ」

笑って語る男にアリスは無感情の顔で応じた。

「だと宜しいのですが、貴方は本当に記憶を取り戻してご自分の正体を知りたいと思いますか？」

「……もしかして、僕の正体についてなにか手がかりを得たのかい？」

「ええ、お聞きになりたければ、いつでもお話しいたします」

妙にもつたいぶつた言い方だった。気づいたなら『聞きたければ』など言わずにすぐに話してくればいい。男はアリスの物言いに疑問を抱かずにいられなかった。

「記憶を取り戻したいに決まっているじゃないか。自分の正体がわかればすぐにも記憶を取り戻すかもしれない」

「……D C。なにか聞き覚えは？」

「うゝん、わからないな」

男は口を曲げながら難しい顔をしてしまった。

「貴方はD Cの一員だと思われます」

「そのD Cというのが、僕にはなんのことだかさっぱりだよ」

「D Cは魔導結社の名前でございます。帝都政府からはテロリストと認定され、幹部には多額の懸賞金が賭けられております」

「僕がテロリストの仲間？」

「申し訳ございません」

アリスは謝りながら微笑んだ。男も微笑み返した。

「表情を作る技術はさほど難しいことではないけれど、アリス君の場合はそれが少し違う。ただの表情ではなく、気持ちもこもっているような気がするんだ」

「わたくしはただの機械人形でございます」

「そうだね、見た目は機械人形だ。でもね僕は君は人間の魂を持つているのではないかと思っている」

テロリストと言われた男よりも、アリスの方がよっぽど疑問に満ちた表情をしていた。

「わたくしは魔導士の手によって創られたキリングドールでございます」

「やはり魔導士が……。科学の分野では、脳の情報を吸いだし、アンドロイドにインストールする技術実験が進められているけど、まったく上手くいっていないらしい。けれど魔導の分野では魂を他のモノに乗り移させることを古くからしている」

「わたくしがそれだと？」

「さあ、人為的に成功したという事例はデマでしか聞いたことがないね。もし君が成功例なら君と君を創った魔導士に大変な興味があるよ」

アリスの創造主は今の主人マナではなく、夜魔の魔女セーフイエル。キリングドールアリスはセーフイエルの手にとって創られたのだ。

男の話聞き、アリスは確信を強めていた。

「D C は魔導結社でございますゆえ、貴方様が魔導に深く興味がありなのも頷けます」

「僕としてはピアノニスト説は捨てていないけれどね」

男は笑って言った。

ならばとアリスは突拍子もない提案をする。

「でしたら、このお店のピアノをお借りして弾いてみたらどうでございますか？」

「あはは、それはおもしろい。まだデイナータイムには早いから、少し無理を言えば貸してもらえるかもしれない」

男はヤル気満々だった。すぐさまウェイターを呼んで話をつけると、ピアノを少し貸してもらえることになった。そのとき自分はピアノニストでこのお店とカッブルたちに一曲捧げたいのだと嘘までついた。もう男は一步も引けない状況だった。

男は臆することなく優雅な足取りでピアノの前に座ると、ゆっくりと鍵盤に両手を置いた。あとは自動的だった。

流れるような伴奏が奏でられ、男の指は鍵盤の上で優雅に踊っていた。

ロマンチックなラヴソングが奏でられ、ときには激しく、ときには切なく、演奏はひとつの物語を奏でたのだった。

演奏は数十分に渡り続き、客達は食事の手を止めてピアノの調べに聞き惚れた。

男が最後の曲を演奏し終わったとき、店内は客で溢れかえっており、一斉に握手の海で包まれた。

嬉しそうな顔をして男は一礼し、アリスの待つ席に戻ってき

た。

「なかなかの演奏だっただろう？」

「大変素晴らしい演奏でございました」

二人が話していると、ひとりの女性が席に近寄ってきた。ドレスを着たこの店のピアノ奏者だ。

「まさかシユバイツさんの演奏がこの店で聴けるなんて思っても見ませんでした」

歡喜する女性を男は不思議そうな顔を見つめた。

「僕のことを知っているのかい？」

「はい、大ファンなんです」

そのあと男は女性に握手を求められ、快く笑顔で応じた。

女性が姿を消した後、男はなにかを求めるような目でアリスを見た。

「どう思う？」

「あの女性の間違いでなければ、貴方様はシユバイツという名前らしいです」

「僕って本当にピアニストだったのかな？」

「さっきの女性に確かめてみては？」

「これだけヒントがあれば、いつでも調べられるさ。調べるのはアリス君とのデートの後でも遅くはないよ」

「……デートでございますか」

そんなつもりもなかったらしい。

男は急に席を立ち上がった。

「トイレに行ってくるよ」

「お待ちしております」

男はにこやかに笑ひ店の奥に消えていった。

それからしばらくして、男は帰ってこなかった。

一〇分、三〇分、一時間と時間は過ぎた頃、アリスの待つ席にウェイターがやってきた。

「一時間が経ったら、お渡しするように言われておりました」

「なにでございますか？」

「手紙と言付けを　急用でデートを途中で抜け出すことを許して欲しい、食事は払っておいたのでいつもで店を出ていいとのことです」

手紙を渡されたアリスはすぐに目を通した。

記憶を取り戻したありがとう。お礼としてひとつ忠告がある。今夜は決してホウジュ区には近づいてはいけない。

男はすでに記憶を取り戻していたのだ。そして、謎めいた一文。ホウジュ区にいったいながあるのか？

アリスはすぐさま店を出て、男の行方を捜すことにしたのだ。

男はホウジュ区の教会に来ていた。

「今までなにをしていたのだ！」

怒声を浴びせる黒い影に男は悪びれた風もなく言う。

「レディーとデートしててね。怒るのは当然としても、階位クラスは僕が上だということを忘れて欲しくない」

しかし、昨日の晩からおまえが行方不明になって、俺たちが

「どれだけ焦ったと思っているのだ」

「政府の人間に殺されかけてね、船から海に落ちて死にかけてんだ。そのあとトラブルがあつて、やっとこの場所まで来たんだよ」

この場にいた三つ目の影が口を開いた。

「シュバイツはカナツチだったんじゃないやつたっけ？」

それは少年のような声だった。

「そうだよ、だから死にかけたんだ」

背中D C の刺青を持つピアノスト シュバイツは言った。

教会に居るのは三人。みなD C のメンバーだった。

髭を生やし体躯の良いがつしりした筋肉質の大柄な男の名はドーガ。パンク風の格好をした赤髪の少年がキラ。タキシードに身を包み、シガレットを噴かしているのがシュバイツだった。シュバイツは教会を静かな見回し、ステンドグラスの真下にある巨大なパイプオルガンに目をやった。

「さてと、僕がいない間に準備はしつかりとしてくれていたかい？」

キラが指でOKサインを作ってみせる。

「完璧。あとはあんたがスイッチを入れるだけ」

「それでは一二時の鐘が鳴るまで待つとしよう」

「一二時だなんて言わないで今すぐやるっぜ」

「D C にとつてクリスマスは大切な日であることを忘れてはいけないよ。明日の一番初めに産声をあげることに意味があ

るんだ」

「いったい深夜一二時に彼らはなにをしようとしているのか？ それによってなにが起ころうとしているのか？」

「シュバイツがアリスに送った手紙に書かれていた。今夜は決してホウジユ区には近づいてはいけない。」

「パイオルガンの前に座ったシュバイツは考え深げに、天に伸びるパイプを見つめていた。」

「破滅の鐘が鳴り終わったとき、ホウジユ区は崩壊する。今夜は人も多いからね、どれくらい犠牲者が出るか楽しみだ。」

まさにシュバイツはD Cの一員だったのだ。

「今宵の晩、聖なる夜にホウジユ区でD Cが蠢きだす闇の叫びをあげながら。」

「長身の女は二丁拳銃を構え、金具のついた黒いロングコートの影を翻した。」

「蹴破られる教会のドア。」

「……チッ」

「舌打ちをした。」

「突然、銃を構えて教会に乗り込んできた女に、祈りを捧げていた数人の人々が叫び声をあげた。」

「その中のひとり、金髪のメイド姿の少女だけが毅然としていた。」

「銃をお捨てくださいませ」

「その声を発したのはアリスだった。」

二丁拳銃を構えた女は再び舌打ちをした。

「……チツ。おまえらに危害を加えるつもりは毛頭ない」

響いたハスキーな声を聖堂に残し、女はコートを翻してアリスに背を向けた。

何事もなかったように教会を出て行く女をアリスは追った。

「お待ちください ドライ様」

振り返ると同時に女は銃口をアリスの眉間に突きつけた。

「俺の顔を知っているのか？」

「存じ上げております。貴方様がどの組織に属されているかも承知しております」

「名前は知られているが、俺の顔を知る者は少ない。おまえは何者だ？」

「わたくしはあるお方に仕える機械人形アリスでございます。

貴女様の情報はわたくしの記憶ではなく、製造と同時にインストールされていたものでございます」

「なんの目的で？」

「存じ上げません。わたくしを創った魔導士の意図でございます。しょう」

「誰が貴様を作った？」

「セーフィエル様でございます」

「知らないな」

アリスの興味を失ったドライはコートを翻し足早に歩きはじめた。

そして、背中姿にアリスは眩きかけたのだった。

「D C」

驚いたドライは引き返し、アリスの首を鷲掴みした。

「なにを知っている！」

首を絞められながらアリスは済ました顔で微笑んだ。

「もしかと思い、貴女様に鎌をかけさせていただきました」

「……チツ。それで貴様はなにを知っている？」

「わたくしが偶然に知り合った方がD Cらしく、その方が今夜ホウジユ区でなにかをするらしいのです」

「詳しい話は歩きながら聴く。貴様の話でデマ話が本当の話になりそうだ」

二人はイルミネーションが煌く夜の街を歩きながら、アリスはD Cと係わり合いになった経由を話し、ドライは詳しい話はできないが、と前置きをして、ホウジユ区に潜んでなにかを企んでいるD Cを探していると話した。

信用の置ける垂れ込みから、ドライたちはD Cが今夜なにかを仕出かすと知り、その情報を元にドライはD Cの潜伏先を探していたのだ。その過程でドライはD Cの潜伏先が教会であることを突き詰め、ひとつひとつ教会を回っていたのだ。

一方アリスは、シユバイツの行方を追ってホウジユ区に来たのだが、その行方は一向に知れず教会で祈りを捧げていたのだ。そして、偶然に二人は出会った。

アリスの案内により、ホウジユ区にある教会を回ることにした。

ホウジュ区にある教会の数はたが知れている。本当にそこにD C が潜伏しているのであれば、見つけ出すのは時間の問題だ。

ホウジュ区のほぼ中心にある教会にたどり着いたのは、一二時の鐘が鳴りはじめたときだった。

「なにも起きなかつたな」

ドライが吐き捨てるように呟いた。

「広義でしたら日付が変わっても、夜が明けるまでは昨日の深夜という言い方になります」

アリスが予断を許さないことを指摘した。

教会の明かりは消えていた。

二丁拳銃を構え、ドライが乱暴に教会に踏み込もうとしたとき、世界が揺れた。

それは一二時の鐘が鳴り終わったのと同時、それは教会からパイプオルガンの音が響き聴こえてきたのと同時だった。

すぐさまドライが教会の中に踏み込んだ。

同時に揺れが収まり、パイプオルガンの音も余韻を残しながら消えた。

パイプオルガンを弾いていたタキシード姿の男 シュバイツが演奏の手を止めて立ち上がった。

「コンサートの途中入場は困るな」

コンサートをと言っても、この場にいたのはたった五人だけだった。

ドライの二丁拳銃はシュバイツの左右に入るドーガとキラに

向けられていた。

チェインソーを構えるドーガとヨーヨーのような武器を構えるキラ。武器を手にしていないのはシュバイツだけだった。

シュバイツはとても残念そうにアリスに目を向けた。

「今夜はハウジユ区に來ないようにと忠告したのに残念だよ」

「ハウジユ区の屋台のたこ焼きがわたくしの主人のお氣に入りまして、どうしても買つて來いと駄々をこねるものですから致し方なく」

もちろんジョークだった。

ドライが武器を持った二人に命じる。

「武器を捨てるD C の外道ども！」

武器を捨てる様子も見せずドーガが牙を剥く。

「偉そうにおまえ何者だ！」

「ワルキューレ所属ナンバー三、ドライだ」

ワルキューレ それは帝都政府の最高主権者直属の公安組織の名だった。

ドライが名乗ったのと同時にドーガとキラが襲い掛かってきた。

連続して銃口が火を噴いた。

銃弾は小柄ですばしっこいキラには一発も当たらず、大柄のドーガは当ててくたさいと言わんばかりに、何発もの銃弾を身体で受け止めた。だが、ドーガの皮膚から血が噴き出すことはなかった。全て金属音を立てて銃弾は床に落ちてしまったのだ。

超合金の身体を持つ男 それがドーガだったのだ。

チェーンソーを振り回すドーガはドライの目の前まで迫っていた。

そのとき、アリスの声が高らかに響き渡った。

「ターゲット確認 ショット！」

アリスの肩に担がれたロケットランチャー コメット が発射された。この場所が教会だろうと関係ない乱暴な攻撃だ。教会で祈りを捧げても、信仰心はゼロなのだ。

カーブを描いた コメット はドーガの腹に激突し、ドーガは身体をくの字に曲げて後方に吹っ飛ばされた。

ドライは命を救われたが、立ち込める硝煙で視界を奪われ、目の前まで迫っていたヨーヨーに気づいていなかった。それに気づいていたのはアリスだ。

「ドライ様お躲わしてください！」
遅かった。

二つのヨーヨーがドライの持っていた二丁拳銃にヒットし、拳銃は回転しながらドライの手を離れてしまった。

舌打ちが聴こえ、硝煙が晴れると、ヨーヨーの糸に身体を拘束されたドライの姿があった。

「貴様のおせっかいでこのザマだ」

毒づくドライにアリスは頭こっぺを垂れた。

「申し訳ございません」

今さら謝っても遅い。すでにドライはチェーンソーを首元に突きつけられ、床に胡坐をかいている。

ランチャーを担いだアリスにシユバイツは投げかける。

「アリス君も武器を捨ててもらいたい。君には恩義があるから、できれば穏便に済ませたいんだ」

「事と相談によります、この場所でないをなさっているのですか？」

「新兵器の実験さ。この場所を震源にホウジユ区に地震を起こす。そう、ここにあるパイプオルガンは擬装だ」

「地震を？ ならここも危険なのではございませんか？」

「通常の地震は震源地がもつとも揺れが大きいが、これは違うんだ。この場所を中心に波紋のように揺れが伝わり、外周がもつとも揺れが強くなる。今回の実験では半径五キロを予定しているが、最大震度はマグニチュード八を予想している」

一九二三年に起きた関東大震災がマグニチュード七・九であり、当時の死者は約一〇万人のぼり、行方不明者は四万人を超える。

大都市ホウジユ区には一〇万人以上の人間がいる。半径五キロは面積の半分にも満たないが、それでも悲惨な状況に見舞われるのは目に見えている。

都市を守りたいという使命感がアリスにはあるわけではなかったが。

「先ほども申しましたが、ホウジユ区の屋台のたこ焼きが主人のお気に入りなので、ホウジユ区が壊滅状態になるのは大変困ります」

「そんなに美味しかったこ焼きなら僕も食べてみたいが……」
「シュバイツは微笑を一転させ、冷笑を浮かべた。」

「残念ながらこの計画は三年以上前からのものでね。途中でやめるわけにはいかないんだよ」

とても残念そうにアリスは俯く。

「そうでございますか……わたくし、“マジ”強いですけど、それでも殺りましてございますか？」

アリスが顔をあげたとき、唸り声をあげたチェンソーはすぐそこまで迫っていた。

冷静沈着に、アリスは無表情の瞳で唱える。

「コード000アクセス 九〇パーセント限定解除。コード007アクセス メール 装着」

アリスの身体を包み込む白いボディースーツ。

高速回転するチェンソーの刃をアリスは腕を受け止めた。

「ダイアモンドカッターでも三分間ほど防ぐことができます。

ただし、そこに“業”が加えられれば話は別ですが……」

「うんうんうんっ！」

ドーガは歯を食いしばりながらチェンソーに力を込めたが、アリスの腕を切断することはできない。刃が火花を散らせ、空気が焼ける臭いだけがあった。

「力押しでは一生切れません。パイプで人が斬れるくらいでございませんと」

蒼い眼は氷の冷笑を、口元は悪戯な嘲笑を浮かべていた。ただの機械には作りえない表情であった。

よりいっそうチェンソーに力を込めるドーガ。

それでもボディースーツが切ることはできなかった。

一向に先に進まない敵の攻撃を、いつまでも待っているほど、アリスはお人よしではない。

「コード001アクセス　　ビームセイバー　　召喚^{コール}」

輝く粒子のソードを別空間から転送させ、アリスは自分の手元に召喚した。

残像を残しながらソードがドーガの中を翔ける。

ドーガの腰から肩まで鮮血が線をつくり、間を置いて血が一気に噴出した。

「あががあが……」

巨大な胴体がずるりと床に落ちた。

「鋼の肉体が通用するのは通常の武器だけでございましたね」

巨漢をあつさり我真つ二つに切ったアリスはドライを捕らえているキラに、挑発するような冷笑を浴びせた。

「かわいそうなドーガだぜ。けどな、あいつはドジでのろまで使えねえ奴なんだよ。強いのはこのオレ様」

予備のヨーヨーを二個取り出し、俊足のキラがアリスに挑む。キラのスピードは人外の速度に達し、目で追うことはできても捕まえることはできそうもなかった。人間ならば。

誘導ミサイルのように、糸を曲げながら二個のヨーヨーがアリスに魔の手を伸ばす。

ソードを構えたアリスはヨーヨーを迎え撃った。

バッドスイングされたソードがヨーヨーを打ち返す。だが、ソードとヨーヨーが触れた瞬間、大爆発を起こしたのだ。

目の前の爆発で吹き飛ばされるアリス。

それを見たキラが笑う。

「キャハハハ、ザマーみる！」

ヨーヨーはキラの意志によつて爆発を起こす仕組みになっていたのだ。

石床に手をついて立ち上がるアリスの顔は煤で汚れていた。

しかし、その陶器のような肌には一切の傷もついていなかった。

「髪が少し傷んでしまいましたが、その程度の爆発ではなんの損傷もございません……残念ながら」

「コロス、コロス、コロス！」

キラの手からヨーヨーが放たれる。

だが、いくら攻撃しても同じだ。

ソードでヨーヨーを弾きながらアリスがキラに詰め寄る。

大きくソードが横に振られた。

空を斬った。

アリスの移動速度をキラは超えていた。重量の重いアリスは人間より少し早く動ける程度の移動速度しか出せないのだ。ただし、オリンピッククに出られれば全種目は制覇できる。

ソードを躲したキラは高らかに笑った。

「キャハハ、ノロマ！」

「その点に關しましては、わたくしを創った魔導士に申してください。コード009アクセス　イリユージョン　起動」

キラは目を疑った。

アリスの残像が二つに分かれ、二人のアリスが現れたのだ。

ふたりのアリスは鏡に映ったように同じ動きをした。

キラの左右を囲むアリスが唱える。

「コード006アクセス ブリリアント 召喚^{コール}」

二人のアリスが輝く球体を呼び出し、計一二個の球体から一気にレーザーが照射された。

さすがのキラにもレーザーすべて躲わす術はなかった。

肉の焼けた臭いが鼻を衝き、キラは床の上を転げまわった。

膝が黒く焼け焦げている。

「痛てえよ、痛てえよ、クソヤロウ！ 痛くて歩けねえ！」

突然、聖堂内に拍手が鳴り響いた。

「ブラボー、大変素晴らしいよアリス君」

それはシュバイツだった。

「実に君は素晴らしい、ただのキリングドールとは思えないね」

「ええ、S級でございますから」

S級 それはつまり軍隊でも相手にできるとい意味だった。

「僕の所有物になるつもりはないかい？」

「ございません」

きつぱりとアリスは断言した。

「それは残念だ……ならば仕方ない。武器は海に落としたけれど、ボクシングは剣にも勝てると思っっているんだ。シャドウフック！」

なにもない場所からアリスは頬に衝撃を受けて横に飛ばされ

た。

アリスが立ち上がるよりも早くシュバイツが消えた。

「シャドービハインド!」

声だけが聖堂に響く。

どこに消えた？

シュバイツはアリスの真後ろに立っていた。

振り向いた瞬間、アリスは顔面にパンチを浴びて後方に吹っ飛ばされて、並んでいた備え付けの木の座席を何重にも渡ってぶち壊してしまった。

「申し訳ないが僕はフェミニストじゃないんだ」

シュバイツは冷笑を浮かべていた。

立ち上がりながらアリスは自分の頬に触れた。

「装甲が三ミリほどへこんでしまいました……修理が終わるまで外を歩けませんわ」

ドーガとキラが傷一つ負わせることのできなかった相手に、シュバイツはただ一撃のパンチで装甲をへこませたのだ。

いや、違った。

「五発ほど入れさせてもらったんだけど、やっぱり君は硬い」とシュバイツは言った。そう、実は一瞬の間にシュバイツはアリスの顔面に五発のパンチを食らわしていたのだ。

「しかし、今のは小手調べ。本当は二〇発は入れられた」

「武器を持っていたらもつとお強いのでございますか？」

「こけおどしくらいの魔導は使えるんでね。これでもD Cの幹部のひとりだから？」

シュバイツは殺気に気づいた。

「ならここで死にな！」

そこにはヨーヨーの糸を抜けて拳銃を拾って構えたドライの姿が！

引き金に手をかけたドライの様子が可笑しい。

「チツ！」

ドライは舌打ちながらセミオートをシュバイツに投げつけた。
ジャミング
動作不良で弾が打ち出さなかったのだ。

ドライはもう一丁の銃を拾おうと床を転がるが、それをシュバイツが許すはずがなかった。

「シャドービハインド」

突然、シュバイツは床の上で拳銃に手を伸ばすドライの前に出現し、拳銃に伸びるドライの手を強く踏みしめたのだった。

苦痛に顔を歪ませるドライ。しかし、その表情が代わったのだ。相手をあざ笑う表情に。

シュバイツは異変に気づき叫んだ。

「なにをする気だ！」

アリスが唱える。

「コード〇〇ハアクセス ショックウェーブ 発動！」

アリスを中心として電波が水面に落ちた雫のように広がり、パイプオルガンのパイプを共鳴させながら振るわせた。

パイプオルガンの中に張り巡らされていた装置が火花を上げた。
た。

轟音が鳴り響き、パイプオルガンが大爆発を起こす。

それを悲愴の面持で見つめるシュバイツ。

「嗚呼、なんてことだ」

銃声が響いた。

ドライの向けた銃口の先にはシュバイツがいた。その胸の中心から滲み出す紅い血が、タキシードの下に着ていた白いシャツを彩った。しかし、シュバイツは銃で撃たれたことなど気づかないように、その場に立ち尽くし、爆発して崩れていく自分の芸術を呆然と眺めていた。

教会全体が激しく揺れ、天井が崩れてきた。

ドライが叫ぶ。

「逃げるよアリス！」

「承知いたしました、ごさいます」

教会の中で立ち尽くすシュバイツを、二人が振り返ることはなかった。

二人が教会を脱出したと同時に、教会は轟音を立てながら全倒壊してしまっただ。

それからのことをアリスはなにも知らない。

ドライになにも言うなと念を押され忠告され、情報はなにもアリスの元に入っただなかつただ。

マナの屋敷に帰ったアリスは何事もなかつたように雑務をこなし、いつものような時間が過ぎた。

アリスにとって、今日はいつもと変わらぬ平凡な日だったのだ。

失われしアリス

年が明けて一週間以上の日が流れたが、まだ人々は正月気分
に酔いしれている。

今宵は満月、そして仏滅。

魔導具販売に置いて手腕を発揮する魔導士にして実業家、加
えて美しい女性とあれば、人々の認知度は高い。この街でその
名を知らぬ者はいないだろう。

神星マナ。

魔導士の名門神星家の長女として生まれ、もつとも若い血を
持つ者。

名門の生まれというだけあって、マナの才能は類い希なるも
のがあった。だが、彼女は努力もせず、魔導の高みを目指すこ
ともせず、そろばんを弾くことに熱心だった。

マナが高みを目指していたら　と嘆く者も多い反面、自分
の地位を脅かされずに済んだと安堵する者も多い。

それでもマナは多くの魔導士たちよりも、高度な存在であり
嫉まれる存在である。

敵は多く魔導士から実業家まで、性格上の問題から関わった
相手を敵に回すことも少なくない。そんな敵に知られてはいけ
ない秘密をマナを抱えていた。

誰かが気づいてしまった。マナは満月の晩には決して出かけ

ない。

満月というのは太古の昔から、魔術などと結びつけられることも多く、こんな噂が立ってしまった。

もしかしてマナは人狼なのではないか？

満月の晩に人が狼、もしくは人狼に変身する伝説。もはやこの街では伝説ではないのだが、マナもそうなのではないかというのだ。

当の本人はそんな噂など取り合わない。

しかし、マナは満月を恐れていた。

もつとも危惧することは、満月の晩に襲撃を受けること。

それがまさに今宵、起きてしまった。

バロック様式の屋敷が建つ広い敷地は、動く石像などのガーディアンによって、二四時間守られている。今まで敷地内に進入されたことがあつて、屋敷内の進入を許したことはなかった。それがいとも簡単に突破された。

敵の狙いはなんだ？

マナか、それとも所有物か、もしくは別の目的か？

敵の目的によって防護策が変わってくる。

境界を張った寝室に立てこもるマナ。すぐ近くには機械人形のアリスがいた。

「わたくしが敵を見つけ参ります」

部屋を出て行こうとするアリスの背にマナの声が投げかけられた。

「行かないで、目的が何にしるここを離れるべきじゃないわ。」

「貴女はここでアタシと“入り口”を守っていればいいわ」

「寝室の奥には隠し部屋があった。そこに重要なモノは全て置いてある。敵の目的がマナであっても、それとも所有物のなかであつて、ここにいれば大抵はどうにかなる。」

「寝室への入り口は一つ、そこを守ることが最重要。もしも扉を開けて何者かが侵入してきたら、一気に攻撃を仕掛けて仕留める。」

その当然の策が破られた。

“別”の扉から敵は侵入してきたのだ。

それはマナの予想を超えていた。なぜなら、その扉はなかったからだ。

扉のない場所の扉を開けて敵は部屋に侵入した。

侵入者は二人組だった。

一人は丸いサングラスをした長身の男。その方には鴉が止まつている。

もう一人はヨレヨレの茶色いコートを着た、どこにでもいそうなオジサンだった。

サングラスの下にある口が嗤った。

「驚きのようですね、アリスさんと……神星マナさん」

サングラスの男が顔を向けた先にいたのは、一匹の黒猫だった。

「アタシに何の用かしらあん？」

物怖じせず黒猫　マナは尋ねた。

サングラスの男はすぐに首を横に振った。

「貴女に用はありません。そうですね、まずは自己紹介をしましょう。D ダイクネスクライ C かやまあやひこ の影山彪彦と申します。こちらは通称“鍵男”、どんな場所でも開けられる能力者です」

扉のない場所の扉を開ける能力。この男の仕業だった。

D C の名はマナもアリスもよく知っている。特にアリスに至っては、過去の何度かD C の団員と刃を交えたこともあった。

とある疑問をマナは口にする。

「D C はここ最近活動していなかった……もしかしたら人知れず解散したのではないかと噂されてたんじゃないかしら？」

「解散はしてませんよ」

と彪彦は応じた。

「解散はしていませんが、活動の制限せざるをえない状況にあります、今現在も」

その状況下で、なぜこの屋敷に襲撃してきたのか？

マナに用はない。では本人ではなく所有物か、もしくは別の目的か？

サングラスに映り込んだのはアリスの姿だった。

「貴女の協力が必要とされています、アリスさん」

その言葉に機械人形らしくアリスは無表情で答えた。

「わたくしに何の用でございますか？」

「セーフィエルさんと取引するには貴女の協力が必要なのです
よ」

その女はアリスを作った魔女であり、元の所有者というべき人物。

アリスは無表情のまま首を横に振った。

「わたくしはただの機械人形の過ぎません。それに今のマスターは別のお方」

「そこに居られる神星マナさんですね。実に才能豊かな魔導士だ。いつしか帝都を担うほどの存在になるやもしれません。わたくしどもの組織でも勧誘のお声をかけようかと、前々から考えているんですよ」

「マスターなら条件次第で勧誘されてしまつかもしれませんわね。ご自分にメリットがあるのなら、世界の破滅にも手を貸す方ですもの」

従者たる存在のその発言を聞いてマナは少しムツとしたが、ここで口を挟んだら話があらぬ方向にいつてしまう。そのくらのことはマナもわきまえていた。

アリスはまるで人間のような妖しい笑みを浮かべ、こう続けた。

「けれど、セーフィエル様は取引に応じる方だと思いで？」

「思いますね」

彪彦は断言した。揺るぎない自信が感じられる。一方のアリスとて、自信があった。

「セーフィエル様という方がわかっておりませんのね」

「それはこちらのセリフですよ」

まさかそんな切り返しを喰うとは思ってもみなかった。

アリスの表情が訝しげになった。

「どういうことでございますか？」

「もう調べはついているのですよ。おそらく貴女自身は覚えていない、もしくは意図的にその記憶をインストールされなかったのか、どちらにせよ事実としてそれは存在しています。忌まわしきあの 聖櫃^{アーケ} を作った彼女、あの方が人として転生したときの妹、アリスさん……貴女はサーフィエルの妹なのですよ！」

アリスは目を丸くした。魂の存在しないただの人形にはできない細やかな表情。

同じような表情をするマナ。

「アリスがサーフィエルの妹!? それに転生したってどういうことなのよ！」

マナとサーフィエルは同じ師の元で魔導を学んだ姉妹弟子。

互いのことはよく知っていた と思っていた。

ひとつマナの心に引つかかる疑念。

師の元で共に学んでいたあの頃と、長らく顔も会わせず再会したサーフィエル。どこか違うと感じていたのだ。それが転生と関係あるのだろうか？

おしゃべりが好きなのか、彪彦はマナの疑問に応じた。

「まずはここからお話したいでしょうか。この街を治める存在……いえ、世界を統べる力を持つ存在についてのお話です。

誰も疑問に思いつながら、その追求は暗黙によって禁忌とされて存在 女帝ヌル。D C の一部の幹部などは、その存

在について事細かく知らされていまい。そうでなくとも、誰も気づいていることでしょう……彼女が人間という存在ではないということ。

女帝と同じ存在は人間ほど多くないものの、この世界に数多く住んでいます。身近なところでは女帝のインペリアルガードであるワルキューレたち。そして、セーフィエル。

私にとってはまだ記憶に新しい 聖戦。あの戦いにおいてセーフィエルの肉体は滅びました。そして、まだ生まれていない赤子の肉体を乗っ取るにより転生を遂げたのです。

人間として生まれたセーフィエルは以前の記憶を失っていたようですが、その潜在魔力は他に影響を及ぼしてした事は窺い知れます。セーフィエルと名付けられたことからわかりますね。

そして、セーフィエルは魔導士としての道を歩みはじめました。マナさんのよく知るセーフィエルです。ただマナさんはセーフィエルに妹がいたことを知らなかったようですね。それがアリスさんなのです。

公式の記録ではアリスさんは交通事故で亡くなっていることになっていきます。では、今私の前にいる貴女は何なのか？

その点について我々も把握しておりませんが、妹のアリスに代わる存在であることは確かでしょう。それは十分に取引の材料となる。あの方は人として転生する以前から、肉親に重度の執着を見せる方でしたから」

この話の中でマナの疑問を解決されなかった。その質問をぶ

つけずにはいられない性分だった。

「今もセーフィエルは人間なの？」

人間外の存在から人間に転生したのはわかった。しかし、マナがセーフィエルの違いを感じたのは、それ以降のこと。

彪彦は艶やかに微笑んだ。

「鋭いですねマナさん。すでにセーフィエルさんの人間としての人生は幕を閉じています。そう、まだ記憶に新しい……三年ほど前のことですね。第二の聖戦 が起きるのではないかと、少なからず噂になったことがありましたよね。多くの人々が知ることなく、その事態は防がれてしまったわけですが、そのときにセーフィエルは蘇りました。そして、去年起きたあの事件へと続くことになったわけです」

去年起きた事件の全容を知るものはごく僅かしかない。事件に絡んだマナですら、わからないことを多い。すべての鍵を握っていたのは時雨という記憶喪失の男。その男ですら記憶を取り戻していないのか、黙して語らずにまた。

アリスは彪彦の求めに応じないことを決めていた。彪彦の話から概要が見えてしまったのだ。

「わたくしは取引の材料のされ、もしセーフィエル様が応じた場合、この街……もしかしたらもっと大きな規模で惨事が起こるということでございますね？」

「そういうことになりましたかね」

と、彪彦は頷いた。

「でしたら協力できかねます」

聞かずともアリスがそう答えることは予想されていた。

そうなるかと力づくということになるだろう。

この場所に進入してきただけで並の実力ではない。おそらく
“鍵男”は戦力ではないだろう。こちらも“黒猫”のマンは戦
力にならない。

アリスと彪彦の一对一の戦い。

いや、彪彦の肩に留まっている鴉がどうも気になる。

アリスはマナに顔だけを向けた。

「宜しいでしょうか？」

「いいけど、壊した物は弁償よ」

「そんなに高いお給金貰っておりません」

「そうだったかしらあん？」

悪意のある惚け方だ。

もう構わずアリスはヤルことにした。

「コード000アクセス 七〇パーセント限定解除。 コード
007アクセス メール 装着。 コード013 シザ
ーハンス 装着」

白いボディスーツに身を包み、アリスは手に嘴状の鉤爪を装
着した。

その姿、特に シザーハンス に注目して彪彦は『ほう』と
感嘆した。

「偶然か必然か、似たような武器を私も持っているんですよ」
肩に留まっていた鴉が彪彦の手に移動して、その姿をまるで
ギミックのように変形させた。それはまさしく嘴状の 鉤爪 。

武器を装備した彪彦だが、その躰からは殺気する感じられない。戦意の欠片もないのだ。

「この部屋では戦いたくありませんね。目に付く一つ一つが高価なアンティーク。アンティークというのは値段の問題ではありません。失われてしまったら、もう二度と手に入らない。たとえ過去にタイムスリップして手に入れても、それはアンティークとは呼べません、新品ですから」

おしゃべりが多いその際にアリスは攻撃を仕掛けた。

シザーハンズ による接近戦。大きく開かれた嘴が彪彦の胸に喰らいつこうとする。

噛み千切るように シザーハンズ が胸を抉った。まるで粘土のように簡単に抉れてしまった。いや、本当に粘土なのかもしれない。

傷口から血が噴き出さないのだ。それどころか肉も内臓もなにもない。粘土のようなモノがいっぱいに詰まっているだけだった。

泥人形、無機生物、ゴーレムなどに代表される作りモノなのだ。

彪彦は捨て身 元よりこの肉体など捨てても構わないのか、強引にアリスの懐に入り、その両腕を拘束してしまった。この体勢では彪彦も次の行動がなにもできない。

だが、もう一人いた。

戦いに不向きそうな“鍵男”の存在だ。

“鍵男”は何の指示もされないままアリスの背後に回り込み、

開けてしまった。

開けたのはアリスの背中。そこから取り出されたのは、抱きかかえるほどの大きさがある筒状の魔導バッテリー。

バッテリーを奪われすぐに機能が停止するわけではないが、それまでの時間は一分とない。

身動きが封じられているアリス。口はまだ動く。

「コード006アクセス ブリリアント 召喚^{コール}」

光り輝く球体が召喚された。そこからレーザーを放つことができる。部屋がどうなるかと、今は緊急事態だ。

発射されたレーザーは彪彦の躰に穴を開ける。ついでに絨毯を焦がした。

躰が蜂の巣になると、痛みを感じていない様子の相手に何の意味がある？

やるなら木っ端微塵に吹き飛ばす技でなくては。しかし、それをこの場所ですることはできない。彪彦と重なるアリスの身が保たなければ、マナにも甚大な被害が及ぶ、この部屋も酷い有様になるだろう。

何もできないまま時間が刻々と過ぎていく。

テンカウントがはじまる。

マナが彪彦の脚に飛びかかった。なんの助けにもならない。それは飛びかかった本人が一番よくわかっているだろう。しかし、このままではアリスが！

五、四、三、二、一。

アリスの瞳が静かに閉じられた。急に重くなる躰^{ボディ}。

崩れかけている躰で彪彦はアリスを抱きかかえた。

「では参りましょう」

歩き出す彪彦。その先では“鍵男”が扉のない場所の扉を開いていた。

マナは懸命に彪彦の脚にしがみついた。

「アリスを置いて行きなさい！」

「残念ですが、それはできません。ところでD C に入団する気はありませんか！」

「あるわけではないでしょ！」

「それは残念。では、ごきげんようマナさん」

蹴るように振り払われ、マナはベッドの上に落とされた。

すぐにマナは後を追おうと駆けだしたが、目の前で“扉”が閉じてしまった。

激しく壁に顔面に打ち付けマナは転倒した。

「痛つたいじゃないのよぉん！！」

頭をクラクラさせながらマナは歩き出したが、すぐに足が止まってその場に横になってしまった。

「もぉ、こんな呪いさせなければ……師匠のこと呪ってやる！」

呪詛しながらマナはその場で力尽きた。

巨大なペット小屋と化した屋敷に、ぽつんと残された黒猫。

「困ったわぁん……」

マナは独りごちた。

利己主義で、自己中で、世界は自分を中心に回ってるマナでも、とりあえず人間の血が通った人間だ。攫われたアリスを救おうと考えた。

しかし、猫の躰でできることなど限られている。

とりあえずマナは助けを求めることにした。

装飾の華麗なクラシックな電話　しかもダイアル式でマナは知り合いのTSに連絡を取ろうとした。

受話器からベルの音が聞こえ、すぐに相手が出た。

《はい、ジズシエスタです》

若く少し声のトーンの高い女の子が出た。

「仕事の依頼よ、早く時雨ちゃんに代わって頂戴」

《時雨さんはもうTSの仕事をしていないんです、ごめんなさい。他のTSを当たってください》

「ハ〜ル〜ナ〜！　あたしの声がわからないのぉ〜！」

《あ……マナさんですか？》

「そうよ、てゆーかあなたまだ仕事してるの？　もうすぐ生まれるんですよ？」

まずハルナは雑貨屋ジズシエスタの経営者である。そして、妊娠一〇ヶ月だったりした。

《時雨さんが出かけていると店に誰もなくなっちゃうんで》

「そーゆー問題じゃないでしょ〜。バイトくらい雇いなさいよ」

《そんなお金ありませんよ。これから赤ちゃんだって生まれるんですからあ》

「だったらまた時雨ちゃんがTSに復帰すればいい話じゃない？」

《ダメですよ！ 赤ちゃんが生まれてくるのに、時雨さんにもしものことがあつたら……この歳で未亡人だなんて死んでもイヤです！》

「あなたまだ一九でしょ？ 人生なんていくらでもやり直し利くわよ」

若干の皮肉が込められていた。と言っても、マナはハルナとそう歳が離れているわけではない。ただ、二十歳以上と未満の差をマナはナーバスになっているのだ。

こんな世間話をしている場合ではないとマナはハツとした。

「違いわ、こんな話してる猶予はなかったんだわあん。時雨ちゃんはどうしたの、時雨ちゃんは？」

《だから出かけてますけどお》

「つたく、これだから……ハルナちゃんからもケータイ持つように言つて頂戴。帰ってきたら伝言を伝えて、あたしのケータイに連絡いれないと末代まで呪うつて！」

《それ困ります、末代ってアタシたちの子供って意味じゃないですかあ！！》

「だったら今すぐ離婚でもなんでもしなさいよ」

《そんな理不尽な……》

「そういうことだから、さようなら」

ガチャンと電話を切った。かなり一方的だ。

「……役立たず」

と呟いてからマナは頭を抱えた。

マナが黒猫に変身してしまう秘密を知る知り合いは少ない。その少ない中の時雨だったのだが、ケータイも持っていない原始人だった為に連絡がつかない。できれば秘密を知っている者に協力を仰いだ方がリスクが少なくて済むのだが……。

事件の最大たる問題はアリスが攫われたこと。次に問題なのがセーフィエルと連絡が取れないこと。この二つ目の問題が事件をややこしくしているのだ。

セーフィエルは謎の多い女だ。先ほど彪彦から聞いた話ですらに謎が深まってしまった。同じ師弟同士であるが、連絡先すら教えてもらっていない。マナは勝手にライバル心を燃やしているが、決して仲が悪いわけではないので悪しからず。

もともと機械人形アリスはセーフィエルが製造したもので、マナに痛い目を見させるための殺^{キングドール}人人形だった。と、マナは思っていた。しかしどうやら真相は違うらしい。

アリスは敵としてマナの前に現れ、さらに襲いかかってきたという既成事実はある。そして、アリスはマナの手によって改造され、マナの忠実……とは言えないが、メイドとしてマナ邸に住み込みで仕えることになった。

筈だったのだが、常にセーフィエルは裏で糸を引き、実際のところはアリスは誰の僕であるかわからない。むしろ、誰の僕でもないのかもしれない。

アリスとはいったい何か？

果たしてその答えをアリス自身は答えることができるのだろ

うか。

全てを答えられるのは、おそらくセーフィエルのみ。

「まあ、セーフィエルちゃんつたらどこにいるのよおん!!」

再びマナは受話器を握った。猫の手で器用にダイヤルを回す。呼び出しのベルが鳴り続ける。なかなか相手が出ない。

堪え性がないマナは猫爪をガリガリしそうになるのを堪えるので必死だった。

「はやくはやく出なさいよおん!」

それから十数秒待って、ようやく相手が出た。

《……マナちゃん……満月の日はあたしも辛い知ってるでしょ?》

マナが電話を掛けたのはゴスロリTSで有名な夏凜だった。

「知ってるわよ、でも緊急事態なのよおん!」

《あたしのほうが緊急事態。今こうしてる間もマナちゃんのと血祭りあげたくて仕方ない》

「ごめんなさい、あたしが悪かったわおん。どうぞお大事に」

ガチャツとマナは受話器を置いた。

マナと同様、夏凜も満月の日は危ない。二人は同じ人物に呪いをかけられ、それぞれ“症状”が異なっている。夏凜のほうは二四時間、あることに悩まされていて、満月の晩はその副作用で血が騒いでしまうのだ。

最初からマナは夏凜に連絡しても無駄だとわかっていた。だから先に時雨に連絡したのだが、それでも緊急事態なので一様

連絡したまでのこと。

黒猫の秘密を知っているのは、世界でたったの五人のみ。うち二人は今さつき電話をかけたTSの二人、残りはもつとも連絡が取りたいサーフィエル、攫われているアリス。そして、呪いをかけた張本人。

「絶対にありえないわ」

最後の一人を思い浮かべてマナは首を横に振った。

マナに呪いをかけたのは師匠であり、もつとも苦手として会いたくない人物。マナ以上に自分中心に世界の回ってる人物で、どう考えてもマナの頼みなど聞いてくれない。

シャンデリアの電球が点滅して、どこも開いていないのに部屋に夜風が吹き込んだ。

そこに佇む喪服のようなドレスを着た女。まるで夜そのもののような女が、いつしかそこに立っていた。

「アリスはどこ？」

緩やかに流れる水のような声。

マナは少し驚きながらも、まるで驚いていない表情をした。

「あらあん、サーフィエルちゃんこんばんわあん」

「そうね、挨拶がまだだったわね。けれど今は……アリスはどうしたのかしら？」

静かな物腰でありながら、なんという威圧感。正直に言うことが躊躇われた。目の前で攫われたなど口にしたら、極寒の怒りがマナを襲いそうだった。

「ええっと、買い物に行ったのよ。そうよ、近くのコンビニま

で」

「嘘はいけないわ。アリスは完全停止してから、六分以上が経過するとわたくしに分かる仕組みになっているの」

「なにそれ、知らないわよおん？」

「教える必要があつて？」

十二分にある。けれど、ここではマナは口を嚙むことにした。セーフィエルは辺りの気配を探るように部屋の隅々まで見渡している。

「微かに 闇 の匂いがするわ。ここに誰かいたわね……それでアリスはどうしたの？」

「……簡単に言っちゃうと、鴉を連れた男たちに攫われちゃつたのよおん」

明るく言ってみたが、セーフィエルは感情を表に出せず、氷のような眼差しを床に向けている。

「影山彪彦…… D C の残党が何を……」

と呟き、セーフィエルは顔を上げてマナを見据えて言葉を続ける。

「貴女のところにアリスを“預けて”いたのは、わたくしのこところよりは安全であると考えていたのだけれど……」

「あらおん、今まであたしはアリスちゃんのお守りをさせられていたわけえん？」

「お守りをしていたのはアリスのほうでしょう。プロトタイプとはいえ、“アリス”の心を受け継いでいる人形を……そうね、敵を皆殺しにしても奪い返さなくては……」

夜風が渦巻くように吹いた。それは荒野に吹く風。

「マナは身を強張らせた。いつものセーフィエルと“何か”違うと感じた。」

「そーつとベッドの下に身を隠そうとするマナに、静かな水面のようなセーフィエルの瞳が向けられた。」

「さようならマナ」

まるで冷たい死の宣告のようであった。

しかし、マナは九死に一生を得たようで、セーフィエルは水面に落とした墨汁のよう揺れ動き、やがてその姿を完全に消失させてしまった。

残されたマナは額の汗を拭った。

「ウチのセキュリティーをもっと万全にしなきゃいけないわえん」

「一晩に二回も進入を許すとは、たとえ侵入者が類似希なる存在であっても許されない。」

すでにマナの頭の中はアリスのことより、新たなセキュリティー対策でいっぱいだった。別にアリスのことをおろそかにしているわけではない。黒猫にできる領分をわきまえ、類似希なる存在たるセーフィエルに全てを託したのだ。

闇夜に潜む陰になりながら、セーフィエルは世界に溶けて移動した。

誘拐犯はわざとらしく痕跡を残している。熟れて甘く魅惑的な匂いが残っている。甘いというのは比喩に過ぎず、それは溺

れるほどに官能的な生と死、あらゆる欲の薫り。

それは 闇 の放つ腐臭ともいうべきもの。

たとえどんなに魅惑的であっても、人が手を伸ばしてはいけない禁断の罠。

この薫りを道しるべのように残しているのは、それこそが罠。やがて痕跡は学校の校庭へ導いた。

夜の学校は昼間とは打って変わって静かなものだ。

ここで痕跡は途絶えた。

校庭にはボール一つもなく、人の気配もない。では、敵は校舎で待ち受けているのか？

否。

セーフィエルは見えない壁にそつと触れた。結界だ。

見えない壁は外部からの侵入者は拒む。

だが、おそらく敵の予想していることだろう。

セーフィエルの指先が見えない壁を通り越し、こちら側からはまるで指先が消失したように見える。そのままセーフィエルは内部へと進入した。

内部に進入すると見えなかったモノが姿を現す。

校庭の真ん中に立つ長身の男。その肩には鴉。

「わざわざこんなところまでご足労でした」

恭しく彪彦は頭を下げた。その傍らにはウッドチェアに座らされたアリスの姿。項垂れたその姿は未だに機能が停止しているらしい。

セーフィエルは足音も立てず彪彦に近づいた。ただし、一定

の距離を開けた。およそ五メートル。

「D C の残党が、なぜこんなことをしたのかしら？」

「残党とは言葉違いです。まだ我々は解体もしておりませんよ」

「つまり求心力を失った今、それを取り戻す工作をしていると理解してよろしいかしら？」

「やはり貴女だと話が早くて助かります。もう察しがついてい
ると思います。あのお方とのリンクが断たれ我々は窮地に陥
っています。初めのうちはその事を隠して組織を動かして来ま
したが、やはりそれには限界がありました。そして、もつとも
問題なのは第一^{セカンドオーダー}団が不老でなくなったことです。この特権を
得るために活動している団員も少なくありません。不老でなく
なつた者たちは今や大あわて、その様を見ていると笑えるもの
がありますよ」

丸いサングラスの下で薄ら笑いを浮かべた。

魔導結社D C の本質を知るものは少ない。一般人から見
れば、ただのテロ集団と見なされるだろう。しかし、その実体
はもつと強大なモノのために動いている。

彪彦からの話を要約すると、現在D C は“あの方”と連
絡、ないしは供給される“チカラ”のようなモノを断たれてい
ると考えられる。そして、そのことによりセカンドオーダーに
所属する者たちが不老でなくなってしまった。

「わたくしは貴女も知っているとおおり、すでに不老の存在です

から、目的は純粹なあの方への忠義で動いているんですよ。あの封印を解くことは貴女でもできないことを知っています。が、再びリンクを繋ぐ方法くらいは知っているのではないかと思いませんかね」

「アリスと引き替えに、それをしるというのね。そう、過去のわたくしは 闇の子 の封印を解くことも目的のために辞さないと考えていたわ。けれど今は理由がない」

「交渉決裂ですか……本当は人質をこの人形娘ではなく、解き放たれた貴女の娘にしたかったのですが、どうしても居場所が掴めなくて。帝都政府も見つけられないくらいですしね」

「どちらにしても交渉は不可ね。交渉などせずとも、わたくしは人質を取り返す」

セーフィエルの次の行動は彪彦にも読めた。人質の奪回。そのため、直接アリスに向かうか、それとも彪彦を葬るか。

鴉が上空へ逃げ、彪彦はアリスに手を掛けようとした。

だが、セーフィエルの扇から放たれた風が彪彦の躰を引き千切った。まるで彪彦の躰は霧のように、風によって掻き飛ばされたのだ。

地面に迸って散らばった泥のような物質。人間の残骸とは決して思えない。

セーフィエルはアリスを抱きかかえ、すぐに上空を見上げた。

「まだやるつもり……彪彦？」

呼びかけられたのは鴉。

「さすがは貴女だ。一撃でわたくしの人形を破壊するとは……」

やはり、わたくしをよく知る貴女では分が悪い」

その声は彪彦のものだった。そう、こちらの鴉こそが彪彦の本体なのだ。

分が悪いことを知っていて策もなしに挑むことはしないだろう。

「いつ貴女に気づかれるか怯えていましたが、まだ気づきませんか？」

「この結界内部から外の様子がまったく窺えないことに何か関係があるかしら？」

見えない壁の向こう側。学校の校舎やフェンスの向こうの道路。一見して不審な光景はない。だが、長くその光景を見続けていればいつか気づくだろう。

景色がまったく動かないのだ。

「気づかれておりましたか、すでにこの場所は包囲されています」

彪彦の言葉が終わると同時に、結界が音もなく解かれた。

多勢に無勢。セーフィエル相手に何十人もの D C 団員が待ち構えていた。

生け捕りは殺害よりも困難だ。相手がセーフィエルならば尚のこと。

東洋龍のような形をした金属のアームがセーフィエルに襲いかかった。さらに背後からはヨーヨー、地面からは幾本もの怨霊の手が伸びた。

アリスを抱いた状態では、セーフィエルの技に制限がある。

一人であれば敵の攻撃など難なく回避や無効化できるだろう。セーフィエルはアリスを抱きかかえたまま上空に飛翔した。しかし、金属アームが生き物のようにしつこく上空まで追ってくる。

さらに輝く矢の乱れうちと、セーフィエルの頭上に落ちてくる稲妻。

天空にセーフィエルは手を掲げたかと思うと、その手を振り下ろした。

刹那、稲妻の進路が急激に変化して、金属アームに直撃した。「あがががががっ！！」

金属アームの先にいた巨躯の男が痙攣しながら倒れた。

羽毛が落ちるようにセーフィエルが緩やかに地面に落下する。下では大勢の敵が待ち構えている。

セーフィエルは異空間保管庫から魔導バッテリーを召喚し、そのバッテリーを目にも留まらぬ速さでアリスの背中に入れた。「逃げなさいアリス」

そう命じてセーフィエルは圧縮した空気を放ち、アリスを遙か上空に打ち上げた。

ゆっくりと目を覚ますアリス。

常人であれば上空で目を覚まし、ただただ混乱に襲われるだけだろう。だが、アリスは瞬時に理解した。

「コード000アクセス　六〇パーセント限定解除、コード005アクセス　ウィング　起動」

鳥の骨のような翼がアリスの背に生えた。

さらにアリスは武装を続ける。

「コード006アクセス ブリリアント 召喚^{コールシックス}6」

召喚された六つの球体からレーザーを地上に向けて照射しようとしたとき、それを止めたのはセーフィエルだった。

「ここはわたくし一人に任せて逃げなさい。マナのところには戻らずに追っ手のこない場所へ」

それは暗示のように、絶対服従の命令としてアリスに届いた。敵の目的はセーフィエル。だが、アリスのことを見す見す逃がすことはなかった。

翼の生えた四つ足の獣がアリスを追おうとした。

だが、驚くべきことが起きた。

空を飛んでいた獣が地面に叩きつけられたのだ。さらに地上ではセーフィエル以外が蛙のように地面に這い蹲ってしまった。

それとは反対に、アリスは磁石が弾き飛ばされるように急激に天空へ打ち上げられた。

「超重力発生装置よ」

とセーフィエルは囁いた。

アリスの飛行システムは半重力によるもので、地上の重力が上がったことにより、反発して天空にはじき飛ばされたのだ。

「わたくし独りであれば、貴方たちを滅ぼすことなど容易いと……」

セーフィエルは静かな月のように微笑んだ。

逃げる……どこに？

マナのところへは戻るなど言われた。
行く所などない。

ただの機械人形ではないのだから。
上空を彷徨い続けるアリス。

今宵の満月は心象を表すように淋しい光で地上を照らしていた。

魔鳥がアリスの行く手を阻んだ。

「どこへ行く気ですかアリスさん？」

鴉の姿をした彪彦だった。

「貴方に答える筋合いはありませんわ」

すでにアリスは殺気を放ち戦闘態勢を整えていた。

だが、彪彦は殺気の欠片も見せていない。

「まあ、武器を収めてください。夜間飛行をしながら、ゆっくりとお話をしましょう」

「お断りさせていただきます」

「ご自分の正体に興味はありませんか？」

「わたくしはただの機械人形にすぎません」

過去に何度か、自らを機械人形と称してきた。それはなんら不自然ではなかった。疑問すら浮かばない……いや、その疑念をわざと思わぬようにしていた。

ただの機械人形では出せぬ表情をアリスはしていた。微かに戸惑い、それを必死に押し込めようとしている表情。

アリスの表情を彪彦は見逃さなかった。

「やはり気になるようですね」

「いいえ」

すぐに相手の言葉を打ち消した。それは動揺という感情。

彪彦は聞かれてもいないのに話をはじめた。

「貴女はセーフィエルが人間であつたときの妹……のコピーとも言うべき存在です」

「嘘です、わたくしは……わたくしは……」

「いったい何者なのか？」

明らかに戸惑うアリスに彪彦はたたまかけた。

「貴女の生まれた家系は一流とは言えないものの、力のある魔導士の家系でした。ただ、貴女は母親が妊娠中に魔導被爆したために、他の血縁とは似ても似つかない姿で生まれてきたそうです。金色の髪、蒼い瞳、今の貴女の姿は生前の生き写しらしいのですが、セーフィエルが証拠の多くを隠滅したらしく、写真も何も残っていませんが」

「証拠がないのなら、わたくしはとても貴方の話を信じるわけにはいきませんわ」

「我々も確たる証拠は持っていないのですよ、残念なことに。」

しかし、どこかに証拠が眠っていると我々は確信しているんですよ」

「……………？」

「貴女自身です。交通事故で死亡した貴女の遺体がどこにも葬られていないのです。おそらくセーフィエルさんは今もどこに“貴女”を隠している」

「もしも彪彦の話が本当だととして、もしもアリスが“アリス”

のコピーであるならば……。

今ここにいるわたくしは何者なのか？

存在として、個体として、ある種の生命として、全てが偽りならば……。

感情すらも、自己の意志すらも嘘なのか？

「わたくしはただの機械人形……」

何も疑問に思うことはない。機械人形なのだから、感情など初めから偽りの作り物なのだ。

本当にそうなのか？

魂の奥から湧き上がってくる哀しみ。

魂？

果たして魂の定義とは？

「激しい動揺が顔に表れていますよ」

彪彦はアリスの“心”を突いた。

アリスは思いを振り払うように首を激しく揺らした。

「わたくしはただの機械人形ではありません！」

すぐさま彪彦は否定の言葉を投げかける。

「人間の脳を移植したサイボーグならまだしも、これほどまでに感情豊かな機械人形を未だかつて見たことはありませんよ」

「わたくしの創造主であるセーフィエル様であれば、どんなことでも可能な筈……」

「確かに、彼女の持つ魔導科学力は他の追隨を許しません。実はこの躰は彼女の作品なのです。鴉形の魔導具にわたくしの魂が乗り移ったのです。そのな芸当ができる彼女ですら、今の

貴女を作ることしかできずにいる……何か疑問を感じませんか？」

「セーフィエルはなぜ“今のアリス”を創った？」

「事故で亡くなった妹を蘇らせるため　ならば別の方法もあった筈だ。」

「機械の躰という容れ物を作り、さらに魂ではなくコピーというべきモノを注入した意図は？」

「果たしてセーフィエルは妹の屍体をどこかに隠しているのか？」

「それを使って死者蘇生を行えばよいのではないのか？」

「それとも魂を魔導具に乗り移すことはできても、純粹な死者蘇生とはセーフィエルを持ってしてもできないことなのか？」

「ここで彪彦はこんな誘いをした。」

「探しに行きませんか“貴女”を？」

「この言葉でアリスの心が揺れ動いたのはたしかだった。だが、興味があっても『はい』と返事をすることはできなかった。」

「自分が何者であるのか、それも気になるが……本当に屍体の“アリス”がいた場合、自己の存在を揺るがす事態になりかねない。とても恐ろしいことだった。」

「返事をしないアリスに構わず、彪彦のおしゃべりは続いた。」

「貴女は“貴女”の居場所を知っているのではないかと、わたしは考えているのですよ。本体から記憶を容れ物に移す、あるいはコピーする場合、わたくしだったら全てを移し換えますね。記憶の一つ一つを選別して移すのは膨大な作業になります」

し、ほぼ不可能に近い作業とも言えます。ならば全てを移したあとに一部の記憶にプロテクトをかけたたり、暗示をかけたほうが効率的ではないかと……つまり、それを解除することによって、貴方は全てを知ることができるということですよ」

「貴方はそれをわたくしにしようと言うのですか？」

「はい」

深く彪彦は頷いた。

アリスは沸々と沸き立つ衝動を抑えられずにいた。

知りたい。

その欲望は強く、それを恐れる感情も強い。

人間の感情ともいべきモノで、アリスは悩み苦しんでいた。

たとえ、自分の正体を知るとしても、この得たいの知れない魔導士に頼る必要があるのか。

セーフィエルに頼むことはできない。なぜか恐ろしくて、この話題すら尋ねることができないだろう。

今のマスターであるマナはどうだろうか。いや、アリスはマナに対して心の底から信頼を寄せているわけではなかった。

行く当てもなく、頼るべき相手もない。それが今のアリスだった。

では、やはり目の前の魔導士に？

「貴方の力を借りることはできませんわ。たとえわたくしの記憶媒体にかけられている……かもしれないプロテクトを解いたとしても、そのあとでわたくしをまた人質に取るのでしょうか？
こうしてわたくしを追いかけて来たのも、全ては人質として

の価値があるからでしょう？」

「追って来たのは貴女が言ったとおりの理由ですが、貴女に興味を抱いているのは純粹な好奇心です。その好奇心が満たされるなら、貴女を人質にしないと約束をいたしますが？」

「嘘ですわ！」

「嘘ではありませんよ。貴女を人質に取っても、セーフィエルさんが言うことを聞いてくれるかどうか……。おそらくすでにあの現場にいたうちの団員は全滅、数人はさっさと逃げてしまつたかもしれませんね。セーフィエルさんは我々の手に余る存在です」

「だつたら尚更、人質のようなモノが必要なのではなくて？」

「わたくしは他の団員と違つて事を早急に進めたいわけではないので。封印の一つを失っている今、おそらくあの方の思念が漏れ出すのも、そう遠くない未来だと予測しておりますし」

後半の言葉は独り言のような呟きだった。

たとえ彪彦が約束を守ることが事実だとしても、それを信用する信頼関係がなかった。

「やはり貴方の力は借りませんわ」

「なら仕方ありませんね、力づくということになります」

「こちらも力づくですのでお構いなく」

先に仕掛けたのはアリスだ。

召喚ソールには数秒を有する。ならば速攻で相手に向かって攻撃を仕掛ける。

激しく揺れたドレススカートが、まるで華のように開き回し

あの方の後ろ盾がない今、皆臆病者になっているのですよ」

「影山さんもかい？」

意地悪な表情の質問を、鴉はまるであざ笑うかのような表情で返した。

「わたくしは無謀なことをするほど愚かでないだけです。それにセーフィエルさんの力を借りるにも、あんなやり方では無理でしょう」

「その言い草は可笑しいなあ。アリス君の誘拐を企てて、今回の作戦を提案したのは君だろう？」

「ええ、失敗すると思つてましたよ。焦つて暴動でも起こしかけないD C の団員たちに、一筋の光を与えてやったとも言つたのでしょうかね。希望を持つて一つの目的に団結していれば、それなりに統率も取れるでしょう。そういうことなのですよ、アリスさん」

急に彪彦はアリスに言葉を振り、さらに続ける。

「つまり、わたくしの目的はセーフィエルさんに非ず。本当は……貴女に興味があつたから誘拐したんですよ」

さらに彪彦はシュヴァイツに言葉を投げかける。

「ねえ、貴女もだいぶ興味があるでしょうアリスさんに？」

「あるね。僕ははじめてアリス君に出会つてから、ずっと興味を持ち続けているよ」

二人に見つめられたアリスは、いつの間にか戦意を失つていた。

なぜ、そんなにまで自分に興味を持つのか？

おそらくその答えはアリス自身が持っている。彼女自身の存在が気になるように、周りもまたアリスの存在に疑問を抱く。

アリスはマナのところに預けられてよかったと、今になって思っていた。マナはアリスのことを程度よく無関心であった。もっとも近くにいた存在が、アリスに無関心であったために、自己の存在を疑問に思わずに来れたのだ。

そのままが幸せだったかもしれない。

これほどまでに思い悩むことがあっただろうか。機械人形として、自己の存在を疑わずにいた頃は、決してここまで思い悩むことはなかっただろう。

シュヴァイツの登場でアリスの心は微妙に揺れ動いていた。

彼とは過去に幾度も刃を交えた。敵であることには違いないが、不思議な感情を彼に抱いていることも間違えなかった。

元を辿れば、その出逢いが特異であったからかもしれない。

はじめは敵としてアリスの前に現れたわけではなかった。

クリスマス・イブのあの日、華麗なるピアノの調べ……今でもアリスの記憶に残っている。

しかし、敵なのだ。

力を借りるわけにはいかない。

再びアリスは戦闘モードに入った。

シュヴァイツは仕方なさそうに、少し憂いを含んだ瞳をした。「肉弾戦は苦手なだけだね……影山さん、サポートお願いできるかい？」

「元よりそのつもりです。わたくしの躰は誰かに使われること
によつて、その真価を發揮する魔導具ですから」

シュヴァイツの手に留まつた彪彦は 鉤爪 に変形して装着
された。これで使用者たるシュヴァイツは何もせずとも 鉤
爪 は自らの意志で攻撃を仕掛ける。

手を掲げるアリス。

「コード001アクセス ビームセイバー 召喚^{コール}、コード
002アクセス シールド 召喚^{コール}」

光り輝く剣と盾を装備して向かい打つ。

口を開けた 鉤爪 から魔弾が撃たれた。

シールド で魔弾を弾きながら ビームセイバー で斬り
かかる。

アリスの蒼眼が見開かれた。

なんと大きく口を開けた 鉤爪 の中に ビームセイバー
が呑み込まれたのだ。

鉤爪 の中に広がる闇。その中で ビームセイバー の輝
きは失われ、まるで喰われているようだ。

驚いていたアリスの腹が長い脚に蹴り上げられた。

「いつも思う、君を傷つけることは不本意だと」
シュヴァイツは溜め息を吐いた。

鉤爪 の口から抜かれた ビームセイバー はその輝きを
取り戻している。だが、アリスはその武器を戻した。そして、
別の武器を召喚する。

「コード006アクセス ブリリアント 召喚^{コール}シックス、
照

射！」

雨のようなレーザーを縫うように避けるシュヴァイツ。

その隙にアリスはさらに召喚を続ける。

「コード004アクセス レイピア 召喚^{コール}」

鋭い レイピア で肉を貫かんと踏み込んだ。

シュヴァイツは身を翻して躲そうとしたが、鉤爪 がそれをさせなかった。

突き出された 鉤爪。

突き刺された レイピア。

なんと 鉤爪 は レイピア を呑み込み、そのままの進みアリスの手まで迫ってきた。

アリスは レイピア を捨てるほかなかった。

だが、間に合わない！

腕の消失。後から襲ってくる強烈な痛み。

機械人形である自分に、なぜ創造主セーフィエルは“痛み”を与えた？

疑問をメモリーに過ぎらせながら、素早くアリスは身を引いた。

痛みはすぐに治まる。尾を引かないのが人間との違いだ。

しかし、破壊 というより消失した腕の傷口からは、循環液が垂れ流され、火花が散っている。

鉤爪 が追撃を仕掛けてくる。

シールド が突き出された。大きく開いた 鉤爪 の口でも、シールド は呑み込めない。

「照射！」

待機していた ブリリアント が一斉にレーザーを放った。この距離でシュヴァイツに躲す術はなかった。避けようと試みるが全てを躲せず、いくつかは 鉤爪 が呑み、一発が腕を掠り、もう一発が脇腹を焼き焦がし、さらに一発が背中 of 翼に当たった。

左翼が破壊され、シュヴァイツの躰が左に傾いた。

絶好のチャンスにアリスは攻撃を仕掛けた。

「照射！」

レーザーは確かに発射された。だが、攻撃に気を取られ、防御がおろそかになっていた。

鉤爪 がシュヴァイツの手を離れ飛びかかって来たのだ！アリスの胸が喰い千切られ、無惨にも下半身が地面に落下していった。

片腕を失い、上半身だけとなったアリスを見てシュヴァイツは目を伏せた。

「僕も重傷……だけど……それもやり過ぎだよ……」

彼もレーザーを受けて重傷だった。緩やかに地面にへ落下していく。

アリスの視界にノイズが入りはじめた。

すぐに機能も停止する。

アリスは瞳を見開いたまま、その活動を停止させた。

先に落ちたシュヴァイツよりも早く、アリスは落下していった。

機械人形である彼女は夢を見ない。

なぜなら眠ることがないから。

だから、アリスは虚無の中から目覚めた。

少し眼の様子が可笑しいように感じられた。目覚めたばかりで視界がぼやけているのだろうか　いや、人間でない彼女にそれはない。

最後に残る記憶^{メモリー}。

そうだ、大きな損傷を受けて腕も下半身も失った筈。

だが、腕の感覚も下半身の感覚もある。試しに失った筈の腕を眼の前に持つてくると、確かにそこには腕があつた。

「おはようございますアリスさん。気分はどうですか？」

聞き覚えのある男の声。そこに立っている長身の男。丸いサングラス。肩には巨大な鴉。

記憶回路が混乱しているのか、すぐに名前が出てこなかった。

「影山彪彦……誰……アタシは知っている……アタシ……とは誰？」

アリスは上半身を起こしておでこを押さえた。まるで人間のやる動作だ。

泥人形の　彪彦　は興味深そうにアリスを観察している。

「少し記憶が混雑しているようですね。ここはわたくしの隠れ家です。他人を招き入れるのは貴女とシュヴァイツさんではじめてですよ」

彪彦　の視線を追ってアリスもそちらに顔を向けた。

無機質な手術台に乗せられているシュヴァイツの姿があった。服を脱がされ、代わりに包帯を巻かれている。

すでにシュヴァイツは目を覚ましているようで、軀を動かさずに口元だけで挨拶をした。

「やあ、おはようアリス君」

アリス、アリス、アリス……その言葉がアリスの中で木霊した。

混乱が激しく心を揺さぶる。アリスは怯えるように瞳を見開いた。

「アタシ……いえ、わたくしは……トラックの荷台に……違う……貴方の攻撃で重大な損傷を受けて機能を停止させた？」

「はい」

と、彪彦 は頷いた。さらに 彪彦 は続ける。

「すでにプロテクトと暗示は解きました。両方が掛かっていたようですね。生前の記憶にはプロテクトを、本人の個性には暗示を掛け、機械人形としての偽物の性質を与えられていたようです。今の貴女はご自分のことを『わたくし』と呼ぶ必要もありません。それは機械人形として目覚めたあとの記憶の積み重ね、習慣と新たな人格形成の言わば癖のようなものでしょう」

アリスの場合は主人格が、機械人形後にあるようだった。まるで他人の記憶を持ってしまったような感覚。不思議で気持ちの悪い感覚だった。

次から次へと引き出すことのできる記憶の引き出し。

「わたくしは死んだのですわね……姉とはあまり上手くいって
いなかったよう……あまり思い出したくはなかったことが多い
でも、まるで他人事のように、あまり苦しまずにいられる。本
物のわたくしとすべき存在を客観的に見ているわたくしがい
る。そのことよって、自己の存在を個として認識できたよう
な気がします。あくまで違う存在なのだ」と

本物と出会ってしまったときの恐怖。記憶を取り戻す前は、
そのことよって自己が崩壊するのではないかと恐怖した。し
かし、実際に記憶を取り戻してみると、客観的な記憶として処
理されてしまった。

本物ではない。しかし、偽物ではない。

“アリス”から生み出された機械人形は、“アリス”とは別
のアリスとなった。

今なら本体の屍体と顔を合わせたとしても、似ているモノと
しか思えないかもしれない。

少し物思いに耽っていたアリスだが、ふと思いついたように
顔を上げた。

「わたくしの身体は^{ボディ}どうやって直したんですか？」

彪彦 は首を横に振った。

「直せませんでした。ですから、別のパーツで代用させて頂い
たのですよ」

「だから稼働が少し鈍っているような感覚があるんですね」

「はい、首から下のパーツはほぼわたくしが用意したモノです。
セーフィエルさんの技術には及びませんが、この帝都では最高

峰の技術。見た目は前とさほど変わりませんが、性能に関しては雲泥の差がありますね。それにしてもセーフィエルさんの持つ技術は凄いい、貴女を分解して大変勉強になりました」

すぐにアリスは自分の機能を検索した。

武装ゼロ、特殊機構　コード　へのアクセス不可。視力二〇パーセント以上低下、聴力二〇パーセント以上低下、外部装甲八〇パーセント以上の防御力低下、腕力・脚力・瞬発力などの運動能力七〇パーセント以上低下。

「少し人間の身体能力を上回る程度ですね」

まるで人間に近づいてしまったようだ。機能だけでなく、心も。

自分に心があることを今のアリスは強く実感していた。おそらく人間としての記憶が、そう思わせているのだろう。

アリスは自分をじっと見つめている強い眼差しに気づいた。

それは口を挟みもせず、アリスを見続けていたシュヴァイツだつた。

「なにかな？」

「アリス君の口調が少し変わったような気がするね。しゃべり方だけじゃなくて、中身もだいぶ変わったようだけど」

「そうですか？　客観的に自分を観察してみるとそうですが、あまり実感として自分では変わった感じがしません。自然なことをして自分自身を受け入れているようですよ」

「本質が変わってないことを祈るよ。僕のお気に入りの君はそつちだからね」

シュヴァイツは手術台から降り、畳んであった服に着替えた。ジャケットを羽織り着替え終えたシュヴァイツはアリスに顔を向けた。

「いつ出かける？」

「どういうことですか？」

「僕も影山さんも、今後の君の動向が気になるんだよ。まだ君についての興味が尽きない。次の大きな興味はどこかにあるセーフィエルの妹の屍体さ」

あえて「君」とは言わず、「セーフィエルの妹」として、個々の存在だと言いつけた。

アリスは自分の記憶を探った。

知っている。セーフィエルが隠した屍体の在り処。

目覚めたときから彪彦やシュヴァイツに対する敵対関係は薄れていた。

「一緒に来ますか？」

なぜそんな言葉が出たのだろう？

屍体は自分ではない。だから会っても平気な筈。そう思いただけなのかもしれない。だから、独りで会いに行くのは怖いかもしれない。

「もちろんさ」

シュヴァイツは答え、彪彦も、

「ええ、最後まで同行させていただきますよ。ですがシュヴァイツさん、貴方はまだ傷が癒えないのですから、もう少し休んでいたほうが良いのでは？」

「なにそれ、自分だけ美味しいことする気なのかい？ 君はいつもやんわり人を出し抜こうとするところあるよね。だから信用ならないんだ」

「貴方こそ日頃から虚言が多いですよ」

「虚言だなんてとんでもない」

「では言い方を換えましょう。わたくしや他の階位の高い者に対して言い訳が多い」

「言い訳ではなくて弁解とかじゃないかなあ？」

おそらくシュヴァイツのこういうところを彪彦は言いたいのだろう。けれど、ここで一つ溜め息をついて、話題を切り替えることにした。

「出かけましょう。シュヴァイツさん運転を頼みます」

「僕はこれでも病人だよ。車の免許くらい取ればいいでしょ」

「車は運転できますよ、ただ免許は持っておりません。長生きし過ぎるとそういうところで不便が出るものです。すでに戸籍上は死んだ人間ですから」

「偽造でも偽名でも、いくらでも免許を取得する方法あるでしょ……」

「……つたく、君こそ言い訳が多いじゃないか」

彪彦は言い返さずに黒いコートを翻して部屋を出て行ってしまった。

手術台の上に座っているアリスにシュヴァイツが手を差し出した。

「では行きましようお嬢さん」

エスコートの手を掴まずにアリスは床に降りた。そして、シ

ユヴァイツと顔もお合わせず歩き出してしまった。

独り残されたシユヴァイツは鼻から溜め息を重らした。

「ん〜、つれないなあ」

まだ痛む躰を引きずりながらシユヴァイツもこの部屋をあとにした。

愛車のジャガーは二人乗りだった。

「これじゃあ影山さんは乗れないねえ〜」

ワザとらしいシユヴァイツの言い草。

「乗れますよ」

答えたのは 彪彦 は、そして彪彦が顎が外れるほど嘴を開けて 彪彦 を呑み込んでしまった。

オープンタイプの座席の後ろ辺りに彪彦は留まった。座席と座席の間から顔を出す形だ。

助手席にはアリス、もちろんシユヴァイツは運転席に乗り込んだ。

エンジンを掛け、シユヴァイツは助手席に顔を向けた。

「それではアリス君、道案内をよろしく頼むよ」

「メイ区にお願ひします」

帝都の南に位置するメイ区は相模湾に隣接した都市だ。帝都最大の大学にして、最先端の魔導を学べる場所として有名な帝都大学もある。

彪彦は『ふむ』と鼻を鳴らした。

「もしかして、アリスさんの祖父が所有していた屋敷でしょう

か？ いやしかし、あの場所はすでに我々が調査済みの筈だったのではなかったのか……」

「“彼女”の祖父については調べましたか？」

アリスはあえて“彼女”と差別した。

「いえ、そこまでは調べておりませんでした」

「“彼女”の祖父はマジシャンだったそうです。当時はまだ魔導が一般的でありませんでしたから、祖父はそういういった形で自分の才能を生かしたんでしょうね。だから仕掛けトリックに長けていました」

「ほう、では屋敷には仕掛けがあると？」

「そうです」

どんな仕掛けがあるのか、それをアリスが口にする前にシユヴァイツが阻んだ。

「おっと、レディはあまりおしゃべりではいけないよ。それじゃアオバサンみたいだからね。そのトリックとやらは着いてからのお楽しみでいいんじゃないかな？」

アリスと彪彦は無言で同意した。先を急ぐ必要はない。目的地に着けばわかることだ。

メイ区の郊外にあるその屋敷は西洋風の作りになっていた。

長らくの間、人は住んでおらず、地元では不気味がられている。いや、この屋敷は人が住んでいたときも妖しげな屋敷であった。

屋敷の扉や窓は当然のこととして閉め切られていたが、特別厳重な警戒や防犯システムなどはないようだ。大切なモノを隠して置くには安易すぎる。だからこそ彪彦たちはここを見過ご

したのだろう。

嚴重であればあるほど、そこに何か大事なモノがあると言っているようなもの。

屋敷の扉の前に立ったアリス。

「どうやって進入したんですか？」

これは以前ここを調べた彪彦に対する問いだ。

「鍵男”は便利な男でして、その驚異から帝都政府から指名手配を受けているほです。何せどんな金庫も開けてしまえますからね」

いない者の話をされても何もはじまらない。

シュヴァイツは手の指を大きく開き、強く握りしめてストレッチをした。

「仕方がないね、ドアを壊して入ろうか？」

その提案もすぐにアリスに首を横に振られてしまった。

「いえ、用事があるのは中庭ですから、他に方法があると思います。空から入れればよいのですが……」

ウイング 召喚は使えない。

この場ですでに空に飛んでいる者がいる。鴉の彪彦だ。

「わたくしの出番でしょうかね。口の中に入っていただけです
か、中庭までお運びいたします」

「イヤだ」

シュヴァイツは即答だった。

『やれやれ』といった感じで彪彦は頭を振った。

「仕方がありませんね、お二人ともわたくしの足に片方ずつお

掴まりください」

か細い鳥の足は強く握っただけ折れそうだ。ましてひと一人と一〇〇キログラム以上あるアリスを引っ張り空に浮かぶなど……。

漆黒の魔鳥は巨大な翼を羽ばたかせた。

一度目の羽ばたきではまだ浮かない。二度目の羽ばたきでアリスの足が浮いた。三度目の羽ばたきで確実の空に舞い上がった。

「やはり重たいですね……シュヴァイツさん、やはり降りてもらえませんか？」

「あはは、面白いこというなあ。僕の肉体は脆弱な人間なんだよ、死ぬに決まってるだろう」

すでに地上は十数メートル下。三階建て屋敷の屋根が見え、その置くに五角形の中庭が見えた。

アリスは今や水も止まってしまった噴水を指差した。

「あそこに行ってください」

地上との距離が一メートルを切ったところでシュヴァイツが彪彦から降り、続けてアリスも地面に降り立った。

枯れた芝生の地面。花一つ咲いていない閑散とした中庭。

オブジェは目の前にある噴水のみ。だが、その噴水も止まり、濁った雨水が湛えているのみ。

アリスは服が濡れることに構わず、その噴水の中に足を踏み入れた。

スカートが水の中を泳ぐ。

噴水の中央にある壺を持った女神像。アリスはその像を抱きかかえて、力一杯回転させた。

水の波紋を起こしながら少しずつ像が回転する。それが九〇度回ったところで、湛えられていた水が急激に流れはじめた。

水底に現れた螺旋階段に水が落ちていく。

「こんな仕掛けがあったとは、気づきませんでしたよ」
感嘆を漏らした彪彦がいち早く螺旋階段を下りていく。

シュヴァイツはアリスに手を伸ばした。

「足下が滑りやすくなっているのでお気を付けください、お嬢さん」

伸ばされた手には目もくれずアリスは螺旋階段を下りはじめた。

最後に残されたシュヴァイツは溜め息を漏らした。

「はあ、またフラれた」

頭の後ろを掻きながらシュヴァイツは階段を下りた。

地下は暗闇かと思いきや、ところどころ明かりが灯っていた。

螺旋階段を下りると池を渡した橋に続いていた。天井から落ちた水はすべてこの池に落ちる。

シュヴァイツは鼻に香る何かを感じた。

「うん、磯の匂いがあるね」

もしかしたらこの池は海に繋がっているのかもしれない。

橋の先には扉があった。岩でできた頑丈そうな物だ。

アリスの足が扉の前で止まった。そこから次の行動を取る様子を見せない。

「一族の者だけが開けられる扉だそうです。わたくしに開けられるとよいのですが……」

扉には取つてのようなモノはない。そこにあるのは刻まれた文字。現存するどの言語にも当てはまらず、どの魔導書にも記されていない文字。

アリスはその文字を読み上げた。

「ひらけごま」

後ろにいたシュヴァイツは呆気に取られた。

「それマジなのかい？ 考えた人のセンスを疑うね」

ギャグで当てずっぽうに言ったら当たりそうな呪文だ。こんな呪文で扉が開くとは……開かない？

アリスは踵を返して振り向いた。

「無理なようです」

すぐさまシュヴァイツからツコミが入った。

「呪文が間違ってるんじゃないやなくて？」

「いいえ、合ってます絶対に」

「あんな呪文が正解のわけがないよ」

「わたくしが間違ってると言いたいんですか？」

「そういうことが言いたいんじゃないやなくてさ、思い違いとかあるだろ」

「そんなことはありません。もう記憶は取り戻しましたから」

「取り戻した記憶がセーフィエルの妹の記憶すべてとは限らないだろう？」

「でも……」

二人が言い合っている最中、彪彦は池の上を飛び回って何か感じているようだった。

「池の水が揺れてますね。それもだいぶ激しいようですが？」

その指摘の直後、彪彦は上がった水飛沫の中に姿を消してしまった。

霧のように舞う水の粒の奥に巨大な影が見える。

その姿を確認できたときには、アリスとシュヴァイツは池の中に落ち、この部屋が大きく揺れていた。

池は思ったよりも深い。

水面からシュヴァイツが顔を出し顔に張り付いた前髪を掻き上げた。

「いきなり頭突きなんて、おかげですぶ濡れだよ」

シュヴァイツの視線の先、そこには巨大な額を持った小型鯨のような怪物がいた。あの頭で

いきなり突進してきて、アリスとシュヴァイツはかるうじて避けたが池に落ち、激突した壁が

大きく地鳴りを起こしながら揺れたのだ。

その怪物のシルエットは一見して鯨のようであるが、皮膚は硬そうな鱗で覆われている。

橋は壊され、上げれる陸地もないが、螺旋階段はまだ天井ま

で続いている。逃げ場はそこだけか？

天井近くにはいち早く避難した彪彦が羽ばたいていた。

「長らく使われていない間に、海の怪物が棲み着いたと考えるべきか、それともここで飼われていたのか？」

「ところでアリスが沈んでしまったのですが、自力で上がって来れないでしょうから、どうやって引き上げましょうか？」

「僕か君のどっちかがやるしかないだろ！」

「わたくしは水が苦手ですから困りましたねえ」

「僕だって非力な人間だよ。たとえ水の中とはいえオートマタを抱えて泳げるはずがないからね。」

「と、ここであの怪物はどこに行っただけかな？」

「最初の突進以降、すぐに姿を消してしまった。水面に姿がないという事は水中であることは間違いないが？」

そのとき！

魚雷のように水中を猛スピードで怪物が水面に迫り、そのまま天井高くまで飛び跳ねた。

アリスだ！

怪物の頭にアリスがしがみついている。

再び怪物が水面に落ちる前にアリスは螺旋階段に飛び移った。

彪彦がすぐさまアリスの元へ羽ばたいた。

「これを装備してください！」

彪彦の躰が変形する。鉤爪 だった。

ひとり池に残されたシュヴァイツに怪物が突進しようとしていた。

「僕のところ来るよ、これって弱いもの虐めだろ？」

言葉は余裕だが、置かれている状況は一刻の猶予もない危機。

アリスは 鉤爪 を構えた。

大きく開かれる嘴。

大の大人を呑み込むほど特大の魔弾が発射された。

背中に魔弾を喰らった怪物が飛沫を上げながら水中に沈んだ。

高波が壁を打ち付け、シュヴァイツの姿も消えた。

怪物もシュヴァイツも、どちらも水面から顔を出さない。

やがて穏やかになる水面。

彪彦は鴉の姿に戻り、池の上を飛び回った。

「あの程度で死ぬような人ではありませんし、もし死んだのならば D C の 6 エテフタス、メジャー " 5 の階位は

剥奪、団員としても問題アリですね」

水の中でなにか動きがあった。

水中から巨大な影が浮いてくる。再び怪物が襲ってくるのか。

いや、様子が可笑しい。

確かに上がって来たのは怪物であった。だが、怪物は水面で

上下しながら揺れているのみ。

ただ浮いているだけという表現がしっくりくる。気を失っているか、あるいは死んだようだ。

しばらくして怪物の口がゆっくりと開き、鋭い牙の間から人

間の手が出た。

「怪物に喰われるなんて人生ではじめてだよ、ったく」

無事な様子でシュヴァイツは苦笑いを浮かべ、怪物の口の中から這い出てきた。

「影山さん、早く僕も螺旋階段まで運んでくれないかな？」

螺旋階段まで運んでもらったシュヴァイツはジャケットを脱いで、ぞうきんのように力一杯に絞った。

「できれば今すぐシャワーを浴びたいね」

濁った水が絞られたジャケットからボトボト垂れる。

螺旋階段から続いていた橋も壊され、扉の前に行くことも容易ではなくなった。

しかし、思わぬことが起きていた。

扉が破壊されていたのだ。そう、怪物の頭突きで壁が崩れ、扉までもが破壊されてしまったのだ。今さらながら、あの頭突きをモロに喰らっていたかと思うとゾツとする。

彪彦は脚をアリスとシュヴァイツに向けた。

「さて、先に参りましょう」

突きだした脚に掴まれということだ。

シュヴァイツはうんざりしながらも彪彦の脚を掴んだ。

二人を乗せ彪彦が大きく羽ばたく。そのときに飛んだ水がシュヴァイツの顔にかかった。

「もつと静かに羽ばたけないかな？」

「文句を言うなら落としますよ？」

淡々と脅しを掛けてくる彪彦。

すでに足は池の上。

「レディの顔に水を引っかけるなんて失礼だろ。だから言っただけさ」

シュヴァイツの言葉はあからさまに嘘くさかった。

飛行時間は短いものだった。すぐに扉の奥についた。

長い廊下がまっすぐ続いている。道幅は乗用車が通れるほど大きく、ここも明かりが灯っていた。

先を歩こうとしたシュヴァイツの腕をアリスが引っ張った。

「おっと、なんだい？ ああ、レディファーストだったかな？」

「いえ、仕掛けがありますから気をつけてください」

「仕掛け……本当だ、床に絵柄があるね。実は気づいてたけど、ただの模様かなって」

「順番取りに踏まないと死のトラップが発動します。空から飛び越えようとしても駄目ですから、気をつけてください」

と、視線を向けられたのは彪彦だ。

「わたくしなら心配ご無用ですよ。シュヴァイツさんとは違いますから」

「僕と違うって言い方、明らかに差別だよな。傷つくなあ、仲間意識にかけるっていうのかな。そういえば影山さんて単独任務多いよね？」

「それが何か？」

「友達少ないんだね、可哀想に」

「貴方のほうがよっぽど可哀想ですがね」

二人が言い争いをしている間にアリスは先に進んでいた。

慌ててシュヴァイツが踏み出そうとしたが、絵柄に足を付けそうになってピタツと止まった。

「五枚のタイル……スペードのエースだけど……アリス君どこを踏めばいいか教えてくれるかな？」

「最初は一ペア、次は二ペア、スリーカードと順番に踏んでください」

「遊び心があるね」

一列目と二列目に共通した数字は“一”だった。

彪彦はシュヴァイツの肩に留まった。

「これで空を飛ぶことにならないでしょう」

「人の肩借りるなら、お願いくらいするべきだよ」

「ではよろしくお願いします」

「はいはい」

シュヴァイツはスペードのエースを踏んだ。次にハートのエース。

順調にタイルを踏んでいく。

いち早く扉の前まで来たアリスは次の部屋に消えてしまった。

「アリス君、置いていくなんて酷いなあ」

急いでシュヴァイツはアリスの後を追った。

最後のロイヤルストレートフラッシュ。

「止まちなさい！」

突然、彪彦が声を荒げた。

が、遅かった。

シュヴァイツはタイルを踏み、

「何も起きないけど？」

と、不思議な顔で尋ねた。

「そのタイルはフェイクですよ、残りの列の数を数えてください」

「踏んでもトラップは発動してないけど？」

「まだ間違った数字を踏んでいないからですよ。でもご覧なさい、残りの列はいくつですか？」

残る列は二列。踏んだタイルは“ハートのQ”と“ハートのJ”の二枚。

シュヴァイツはハツとした。

「イカサマじゃないか！」

「違いますよ」

「だって一枚足りないじゃないか」

「残る一枚は目の前の扉なのですよ、ちゃんと見てください」
扉に描かれた道化師の絵。よく見ると、“JOKER”とは掛かれておらず、“J”とのみ、そして道化師の心臓の位置に“ハート”のマーク。

「やっぱりイカサマじゃないか！！」

シュヴァイツは口に手を当てて難しい顔をした。

次のタイルは“ハートのキング”で間違いないが、問題は最後のタイルだ。

一歩進みシュヴァイツは足を止めた。

「踏んだらどんなトラップが発動するんだろうね。興味がある

「けど、やってみたいとは思えないな」

「この位置からまず扉を破壊して、一気に中に飛び込むというのでどうでしょう？」

「頑張つてジャンプできない距離ではないけど、トラップがどんなモノかわからないからね」

「しかしここでじっとしているわけにはいかないでしょう？」

「それもそうだね」

変形した 鉤爪 をシュヴァイツは装備して、放たれた魔弾が扉に撃ち込まれた。破壊された扉の破片が先にいたアリスの躰に降り注いだ。

アリスは眼を丸くしている。

「どうしたんですか？」

「扉が故障したみたいで開かないものだから、仕方なく壊したんだよね、彪彦さん？」

助け船をシュヴァイツは出したが、ぱつぱりと斬られた。

「いいえ、貴方がミスをしたせいですよ」

「またまたあゝ、僕のせいにしちゃってさ。この際、どちらに非があるか争つてないで先を急ごう」

一歩足を後ろに引いて、勢いをつけてシュヴァイツが飛んだ。天井から降り注ぐ雨のような槍。

間一髪でシュヴァイツは次の部屋に飛び込んだ。

「ふう、串焼きになるところだったね、影山さん？」

「ええ、誰かのミスのせいだ」

「そうそう誰かさんのせいだね」

と、チラッとシュヴァイツは彪彦に視線を向けた。まるで他人事。

鴉に戻った彪彦はシュヴァイツと距離を開けた。もう関わるのも疲れたと言った感じだ。

廊下はまだ続いていた。

アリスは歩こうとしない。

「記憶ではここが祖父の隠し部屋だったんですけど、こんな廊下見たことがありません」

「君がすべての記憶を持つてるわけじゃないと思うけどって、言ったかな言わなかったかな？」

シュヴァイツの推測が正しいかもしれないが、本当にこんな廊下などなかったのかもしれない。

廊下に変わった様子はなく、床にタイルなどもない。遠くには次の部屋に続く扉がある。

不審に思いながらも先を進む。

一〇歩も歩かぬうちにそれに気づいた。誰も口に出さずとも答えがわかる。扉との距離が縮まらないのだ。

夜風が廊下を吹き抜けた。

それを合図に振り返ったアリス。

「姉貴……」

意識せずに出てしまった呼び名。

慌ててアリスは言い直す。

「セーフィエル様」

そう、そこに立っていたのは夜魔の魔女セーフィエル。夜の

ような漆黒のドレスを身に纏い、静かに静かにそこに佇んでいた。

「枷が外れてしまったのねアリス……こんなところにまで来るなんて」

冷徹な瞳は彪彦を見据えている。「貴方の仕業ね」と言わんばかりの瞳だ。

彪彦は口から 彪彦 を吐き出し、穏やかに戦いの準備に備えた。

「お早いお着きですねセーフィエルさん。ちょうど良かった、この先の部屋まで案内してもらえませんか？」

「引き返すなら今のうち、さもなければ死を超越した苦しみを与えるわ」

「交渉決裂ですか……では、シュヴァイツさん リピートラビリンス を解くので頼みますよ！」

彪彦 の口から怪音波が発せられ、空気が激しく振動した。視界をも揺らす音波の力は、そこに張られていた結界を破壊した。

シュヴァイツが扉に向かって走る。それを追うアリス。さらにセーフィエルも地面を蹴り上げた刹那、黒い壁が目の前に立ちふさがった。

壁の向こうから彪彦の声が聞こえる。

「追わせはしませんよ」

「小賢しいわ」

セーフィエルの手のひらに力が込められ、黒い壁が消し飛ん

だ。その先で待ち受けていた網。

粘着性のある網がセーフィエルの全身を捕らえた。

「これでわたくしを捕らえたつもり？」

軀を包む網が酸で掛けられたように煙を立てながら溶けていく。網から抜け出すなどセーフィエルにとつて造作ない。

しかし、その僅かな時間稼ぎが命運を分けた。

すでにシュヴァイツは扉を破壊して奥の部屋へ。

そして、アリスも。

「アタシ……じゃない、わたくしじゃない！」

アリスは叫んだ。

無色透明な液体を満たしたガラス管の中に浮かぶ少女の姿。

シュヴァイツはガラスに触れようとした、そのとき！

「止まちなさい！」

凜としたセーフィエルの声がシュヴァイツの動きを封じた。

その後ろから片方の翼を失った彪彦がゆつくりと歩いて現れた。

「ほう、やはり保存されておりましたか。シュヴァイツさんそ

の場で待機ですよ。セーフィエルさんがおかしな行動を取りそうになつたら、躊躇わずにその装置を破壊しなさい」

その発言にセーフィエルは漲る殺気を発した。

「そんなことさせませんわよ」

だが、セーフィエルは動けずにいる。

シュヴァイツは困った顔をした。

「アリス君のそっくりさんを破壊するなんて本意じゃないなあ。

でも上司の命令だからね。けど影山さん、もしかして最初からこれが狙いだっただのかい……ここにいる“アリス”を人質にすることが」

「もちろんそうですよ。機械人形では押しが弱いですからね」
「酷い人だ。ねえアリス君、僕はそんなつもりでここに来たんじゃないからね、本当に興味本位だっただけだから信じて欲しいな」

視線を向けられたアリスは視線を返さず、眼を瞑り声すらも届いていないようだった。

個々の存在、別の人格を持つ違う存在、たとえ記憶をコピーされた存在だったとしても、己は己だとアリスは思っていた。記憶を取り戻したときに、そのことを確認したはずだったのではないか。

しかし、本物の“アリス”を目の前にして、すべて脆くも崩れ去った。

自分はいったい何者なのか？

彪彦はセーフィエルの横を堂々と抜けて、シュヴァイツの横、ガラス管の前まで移動した。

「一時休戦としましょうセーフィエルさん。とは言っても人質は解放しません」

セーフィエルは苦虫を噛み潰したような顔をした。

彪彦の口から吐き出された 彪彦 がガラス管に手を触れた。
「これが貴女の妹ですか……。やはり死んでいる、しかし実に興味深い。わたくしの言わんとしていることはわかりますよね、

「セーフィエルさん？」

「……わからないわ」

「貴女ほどのヒトが成し遂げられない理由。なぜこの娘が蘇ることができないのか？ わたくしも不思議で堪りませんでした」

「何が言いたいのかしら？」

おそらくセーフィエルはわかっている。だが、ここはあえて自ら口にしない。

シュヴァイツは不思議そうな顔で 彪彦 を見ていた。

「僕にはさっぱり。ぜひ詳しく知りたいね、おそらくアリス君もそう思っているよ」

そのアリスはガラス管の前に立ち、ただじつと俯いたまま動かない。先ほどからそのままだ。今なされている話も耳に入っているかわからない。

しばらく間があった。

その時間はセーフィエル、アリスの胸を揺さぶるに十分な時間。

次に口を開けるのが誰か皆、わかっている。視線を向けられた 彪彦 はサングラスの下の口を歪ませた。

「ではわたくしが説明いたしましょう。まずはじまりは 聖戦 ののちに消えたセーフィエルさんの行方です。誰もが靈魂すら滅びたと考えておりましたが、ある日突然、貴女は表舞台に再び現れた。そうです、人間としての魔女セーフィエル。なぜ貴女が人間となったのか、人間としての貴女の背景はどのよ

うなモノか、おそらく貴女が情報の多くを抹消したせいで、調べるのに苦労をいたしました。そしてようやくアリスさんまで行き着いたわけです。

我々は死亡しているアリスさんの降霊を試みました。わたくしどもの組織でももつともそれを得意にする者にもやらせましたが、結果は何も起きず。生命は死した後、霊体としてこの世界の近くにあります。しばらくすると降霊では呼び出せぬ場所へ逝ってしまいます。アリスさんの場合もそれに当てはまるのか、だとしたら黄泉返りは不可能。アリスさんを復活させるには、同じ記憶を持つ偽物を作るしかない。それしかこの世にアリスさんを存在させる道がない」

「それがアリス君と言うわけかい？」

シュヴァイツの問いに 彪彦 は嬉しそうな顔をして、首を大きく横に振った。

「正解ではありませんが、完璧な回答ではありませんね。確かにアリスさんは、そう言った過程で作られたコピー品です。しかし、これはおそらく試作か実験、更なる段階がありますよね、セーフィエルさん？」

「……………」
「今から申し上げる点がもつとも重要です。ここにいる本物アリスさんは医学的には死亡していますが、霊的にいうとまだ死んでおりませんよね？」

生と死、輪廻転生、霊の進化。

生命は死を迎え、肉体を離れアストラル体となる。それが幽

霊と呼ばれるもので、この世界に多く干渉してくる存在。降霊によって呼び出せる存在だ。

アストラル体はそこからさらなる次元へ旅立ち、エーテル体となる。人々が住むこの世界とは別の世界に存在するが、交霊によって意志を交わすことは可能だ。

やがて霊はさらなる次元へ旅立ち、人間が手を出せない場所へ逝ってしまう。もしもそこにアリスの霊が逝ってしまったら、もう黄泉返りは不可能となる。

彪彦の言う『死んでいない』とは何を示す言葉か？

「この本物のアリスさんを見て、確信してしまいましたよ。そうですアリスさんは死んでいない。魂魄はまだその躰の中で眠っている。アストラル体となっていないモノを、生命が死んだとは言えません。そうですよねセーフィエルさん？」

これで尋ねたのは何度目か。その問いに対してもセーフィエルは口を開こうとはしなかった。

不意にアリスが瞳を開けた。その瞳に映る“姉”の姿。

「わたくし……アタシは今も姉貴を拒み続けてる。だから自分の殻に閉じこもって、アンタの好きなようにはさせない、わかるでしょ！」

明らかに違う。アリスであってアリスでない。

驚いてシュヴァイツは口をぽかんと開けてしまった。

「大丈夫かいアリス君、君らしくない」

「アタシはアタシだし。言うことを利かないアタシが疎ましい

から、記憶をロックしてたんでしょ。じゃあなんでアタシを生
き返らせようとしたの、アンタの自己満足のため人形ってわけ
!？」

取り乱した冷静ではない態度でアリスはセーフィエルに詰め
寄った。

セーフィエルを知る者なら、その行動に驚きを隠せないだろ
う。

夜のように佇み、闇のように全てを呑み込む。敵を前にして
決して物怖じすることないセーフィエルが、後ずさりをしたの
だ。

彪彦 は無機質な表情した。

「人間に転生する前の貴女を知っているわたくしからは、とて
も信じがたいことですが、貴女は人間となつて弱くなった。以
前の貴女は何かを何し遂げるためにはどんな犠牲も払う人であ
り、肉親すら悪魔に捧げるようなひとでした。それが今はどう
ですか、死んだ妹に執着し、目の前の亡霊にさえ物怖じしてい
る」

アリスがセーフィエルの胸倉を掴んだ。

「アンタの自由にはならないからな！」

「イヤあああッ!!」

我を失いセーフィエルはアリスを突き飛ばし、怯えたように
その場に頭を抱えてうずくまってしまった。

アリスは尚もセーフィエルを責め立てようと近づこうとして
いた。その足が不意に浮き上がった 何かに吸い込まれるよ

うに。

それは彪彦の仕業だった。大きな口を開けた魔鳥の中へアリスが吸い込まれる。抵抗すら許さず、瞬時のうちにアリスが吸い込まれた。

急に血相を変えたセーフィエルが氷の瞳で 彪彦 を射貫こうとした。

だがしかし、彪彦は悠然とその場に立つたまま、余裕の表情でセーフィエルを見下していた。

「何をする気ですかセーフィエルさん、わたくしは亡霊から貴女を救ってあげただけですよ。所詮、あんな物は偽物に過ぎません。わたくしの後ろにいる者が本物でしょう。この本物をどうするか、全てはわたくしが握っています。貴女の行動ひとつで、アリスさんの運命は変わるのでよ、おわかりですよね貴女なら？」

依然、本物のアリスは人質にされたまま。

機械人形ですらあんなにも我を失うセーフィエル。もしものことがあれば尋常でいられる筈がない。

もはや 彪彦 の言うなりになるしかなかった。

「わたくしの目的は一貫として変わりません。裁きの門を開き、そのさらに奥、タルタロスの門の先にいるあのお方の復活。そこまでできずとも、あのお方の力が“こちら側”に影響するようにしてもらいたい」

それが意味することをセーフィエルは熟知している。

幾星霜にも及ぶ戦いの歴史。

樂園 を墮とされた双子の飽くなき闘争。

いくつの種族を滅ぼし、いくつの文明を滅ぼし、いくつの世界を創るのか？

魔導によつて栄華を極めようとしている帝都エデン。この都市もまた過去の文明と同じ末路を辿るのだろうか？

彪彦はゆっくりとゆっくりとセーフィエルに近づいた。

「妹を救うためなら、貴女はこの世界がどうなるかと構わない筈ですよ。すでに娘さんはこの世界に解き放たれたらしいですね、貴女の策略によつて。女帝のインペリアルガードの永久欠番 ノイン。本名はシオンさんでしたね。

貴女のしたことは、はじめのうちはこちら側に有利なことでしたが、最終的には想像を超えた痛手となりました。元はと言えば貴女のせい、あのお方はこちら側に影響を及ぼせなくなつてしまったのです。最大の枷が外れたというのに、あのお方を封じる力はさらに強くなつてしまいました。もしかして、そこまで貴女の策略なのでしょう？ だとしても今度は不穏な企みなどしないようお願いしますよ。人質がいることを決してお忘れなく」

ガラスの棺で眠る「アリス」。そして、彪彦 に吞まれたアリスはどうなつてしまったのか？

全ては 彪彦 の手の内に。

幽鬼のごとくセーフィエルが立ち上がった。

「貴方の話を聞き入れるわ。闇の子 の復活……世界の終焉まで付き合いますよ」

彪彦はサングラスの下で微笑んだ。

だが、そのときどこからか声が！

「いけませんセーフィエル様！」

その声は…… 彪彦 の体内から、アリスだ、それはまさしくアリスの声だった。

急に 彪彦 が苦しみだし、壊れたブリキ人形のように、ぎこちない動作で床を転げ回った。

大きく開いた嘴から吐き出されるアリス。

「セーフィエル様、早く本物のわたくしを救ってください！」

アリスに何が起きたのか？

いや、何にアリスは目覚めたのか？

そこにいるアリスは何者か？

考えている猶予はなかった。

夜風が人の背を凍り付かせる速さでセーフィエルは移動した。

“アリス”が眠るガラス管の前にはシュヴァイツの姿。だが、彼は何食わぬ顔で道を空けた。

床でもがく彪彦が叫ぶ。

「シュヴァイツさん、貴方つて人はッ！！」

怒号の主とは視線を合わせず、シュヴァイツは口笛を吹きながら天井を見上げていた。

セーフィエルの手がガラス管に触れた。

尋常ではない空気の揺れ。

羽ばたいた 彪彦 がセーフィエルを止めようと飛翔する。

「空間転送などさせるものですかッ！」

彪彦 の躰がアリスによつ驚掴みにされ、宙を引きずられるように投げられた。

セーフィエルを中心として空気の波動が多くを薙ぎ払った。時空が揺れる。

まるで塵気楼を見ているような景色。

セーフィエルがアリスに手を伸ばした。

「掴まりなさい！」

伸ばされたアリスの手。だが、その手をセーフィエルが掴むことはできなかつた。

泥を撒き散らし床を這う 彪彦 がアリスの足首を掴んだのだ。

引きずられるアリスの瞳が大きく見開かれる。

セーフィエルの指先とアリスの指先が軽く触れた、その刹那。衝撃波が巻き起こつた。

泥人形が四散する。シュヴァイツは強風を受けて壁に叩きつけられた。

消えたセーフィエルと“アリス”の眠る硝子の棺。

そして、この場には機械人形アリスの姿もなかつた。

嵐の夜。

街に墜ちる閃光。地面を打ち付ける豪雨。吹き荒む狂風が耳を塞ぐ。

深夜の街を傘も差さずに歩く男がひとり。

稲光がその男の顔を照らした。

陶磁器のように白い肌。浮かび上がる紅い唇。

白銀の髪から雫がいくつもこぼれ落ちる。

そして、男から足下から辿って来た道を示す朱い印。男の流した血の朱だった。

抉られた腹、失われた手首、流れる血は地面に軌跡を描いていた。

「あれは何者だ……？」

呟く声は鋼の響き。そして、氷のような冷たさ。

再びどこかに墜ちた落雷による閃光が男の全身を輝かせた。はだけた胸に刻まれた巨大な十字の刺青

男の職業は殺し屋だった。胸に十字を刻む殺し屋は帝都にただひとりしかない。

宵の明星“ルシフェル”の通り名を持つ 瑠流斗。

足を引きずりながら歩く瑠流斗の視線の先に、雨に打たれ地面に俯せに倒れている人影を見つけた。

近づくとそれが少女だとわかった。

「屍体か…… ちょうどいい君の血を…… ん？」

瑠流斗は足先で少女の躰をひっくり返そうとして気づいた。想像以上に重い躰。

「人間ではなくオートマタか。そんなことにも気づけないなんて、疎ましい雨だ」

瑠流斗は力を込めて機械人形の躰をひっくり返した。

蒼い瞳を見開いたまま、その機械人形は天を仰いで機能を停止させていた。

瞳の横を流れる雨粒がまるで涙のように……。

「そうか、君も捨てられたのか。君はどんな罪を犯した？ それとも邪魔になつて捨てられただけかい？」

不意に瑠流斗は苦笑した。

「嫌な雨だ……感傷的になる」

しばらく間、瑠流斗は雨に打たれたままその場に佇んでいた。じつと機械人形の少女を見つめ、その瞳を見つめながら佇んでいた。

どれくらいの間が流れたのか。

すっかり躰は凍え、瑠流斗の失つた手首から墜ちていた血も止まっていた。

そして、瑠流斗は機械人形の少女を抱え上げ、深い闇に向かつて歩きはじめた。

それが新たな物語への序章。

雷鳴と共に誰かが其の名を叫んだ。

アリス。

失われしアリスを探すその声は、嵐の夜に熄えた。